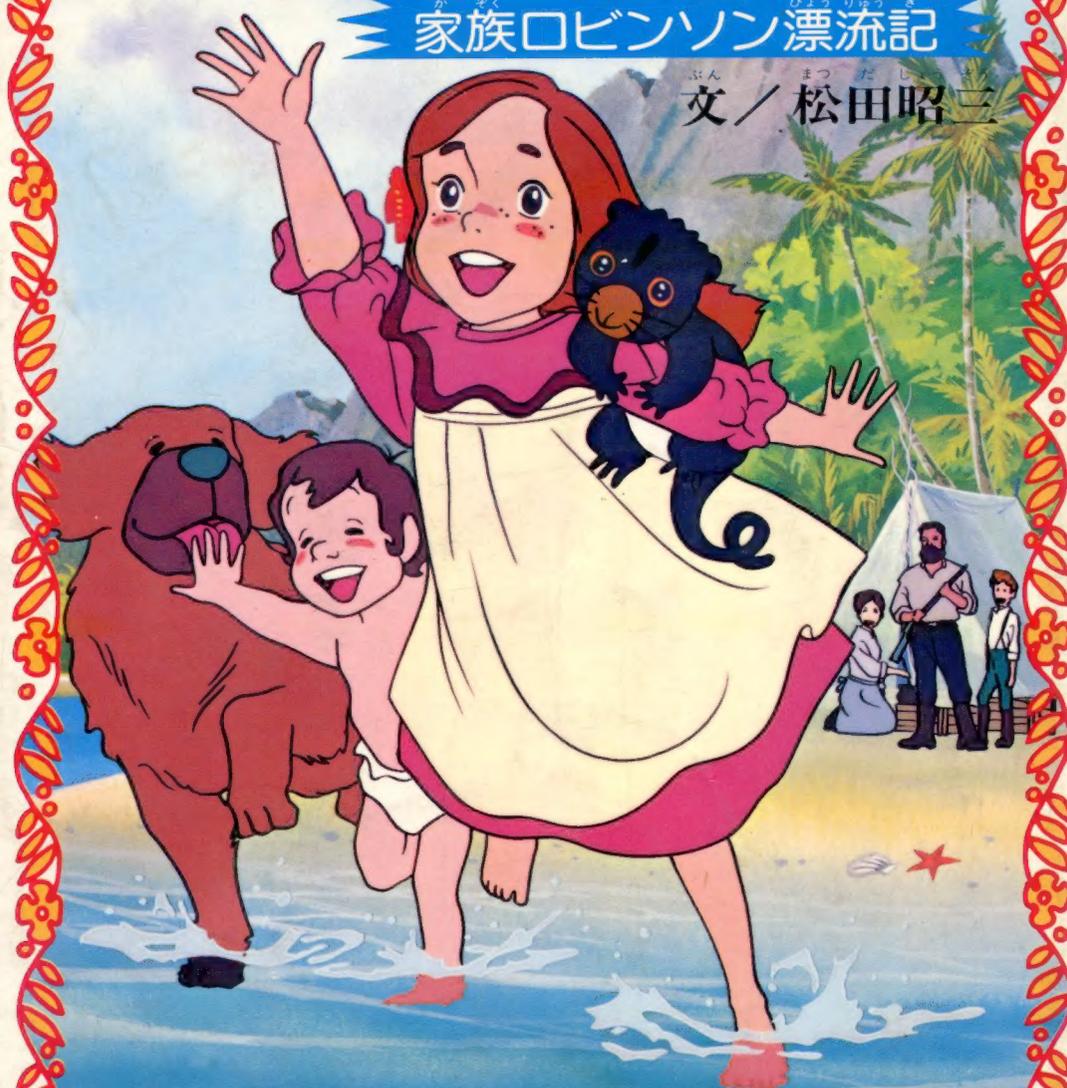


せ かい めい さく  
世界名作ものがたり 33

# ふしぎな島のフローネ

かぞく ロビンソン ひょうりゆうき  
家族ロビンソン漂流記

ぶん まつ だし  
文 / 松田昭三



《朝日ソノラマの子どもの本》

にほんめいさく  
日本名作ものがたり

ぜん かん ほつばいしゅう  
全10巻 発売中

- ① かぐやひめ  
おひめさまのものがたり集
- ② あんじゆとずし王  
かなしいわかれのものがたり集
- ③ 彦一とんちばなし  
とんちとユーモアのある話
- ④ 海さちひこ 山さちひこ  
「古事記」より 日本の神話
- ⑤ 大江山のおにたいじ  
おにたいじのものがたり集
- ⑥ つるのおんがえし  
どうぶつのでてくる民話集
- ⑦ うしわかまる  
少年がかつやくするものがたり集
- ⑧ ゆきおんな  
こわくてふしぎな民話集
- ⑨ わらしべ長者  
しょうじきものの民話集
- ⑩ やじさん きたさん  
ふたりのおかしなたびの話

たい せん じどうさくか しょうがっこうていがく  
第一線の児童作家が、小学校低学  
ねん こ  
年の子どもむけに、すばらしい日  
ほんめいさく かずかず  
本名作の数々をおおくりします。





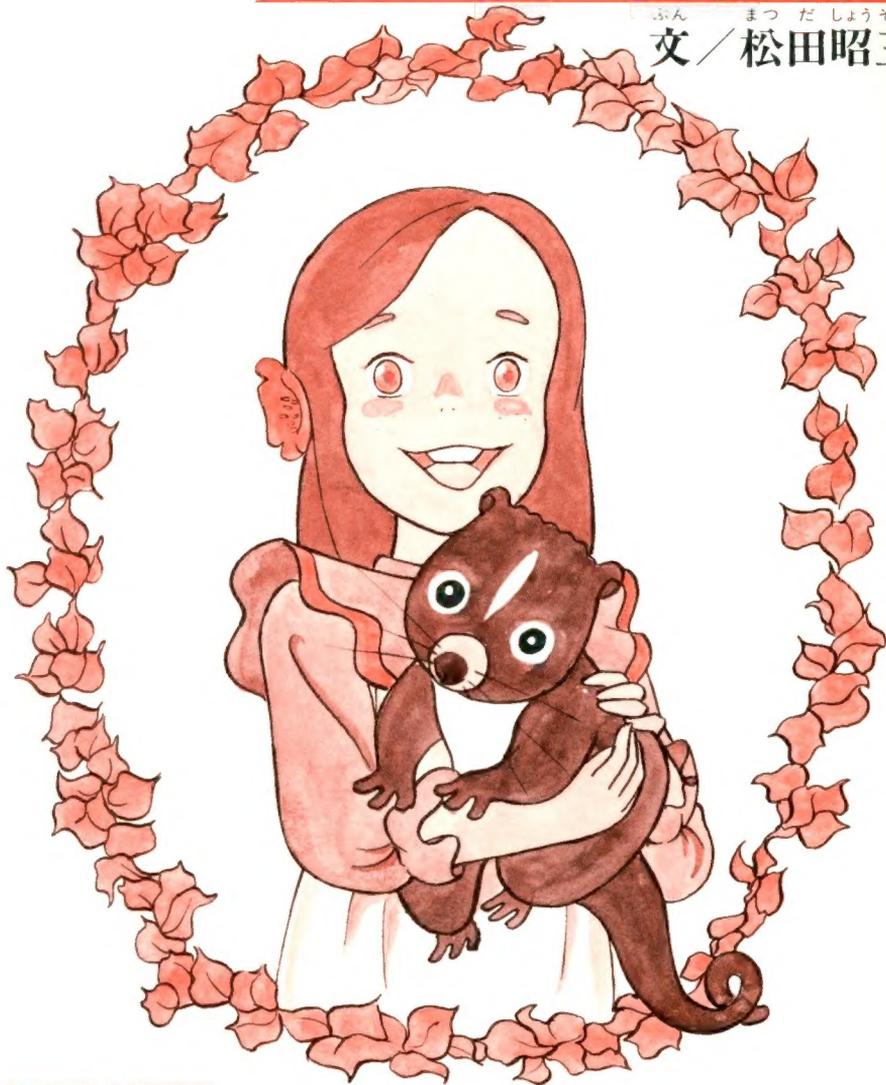


せ かい めい さく  
世界名作ものがたり

# ふしぎな島のフローネ

か ぞく ひょうりゆう き  
家族ロビンソン漂流記

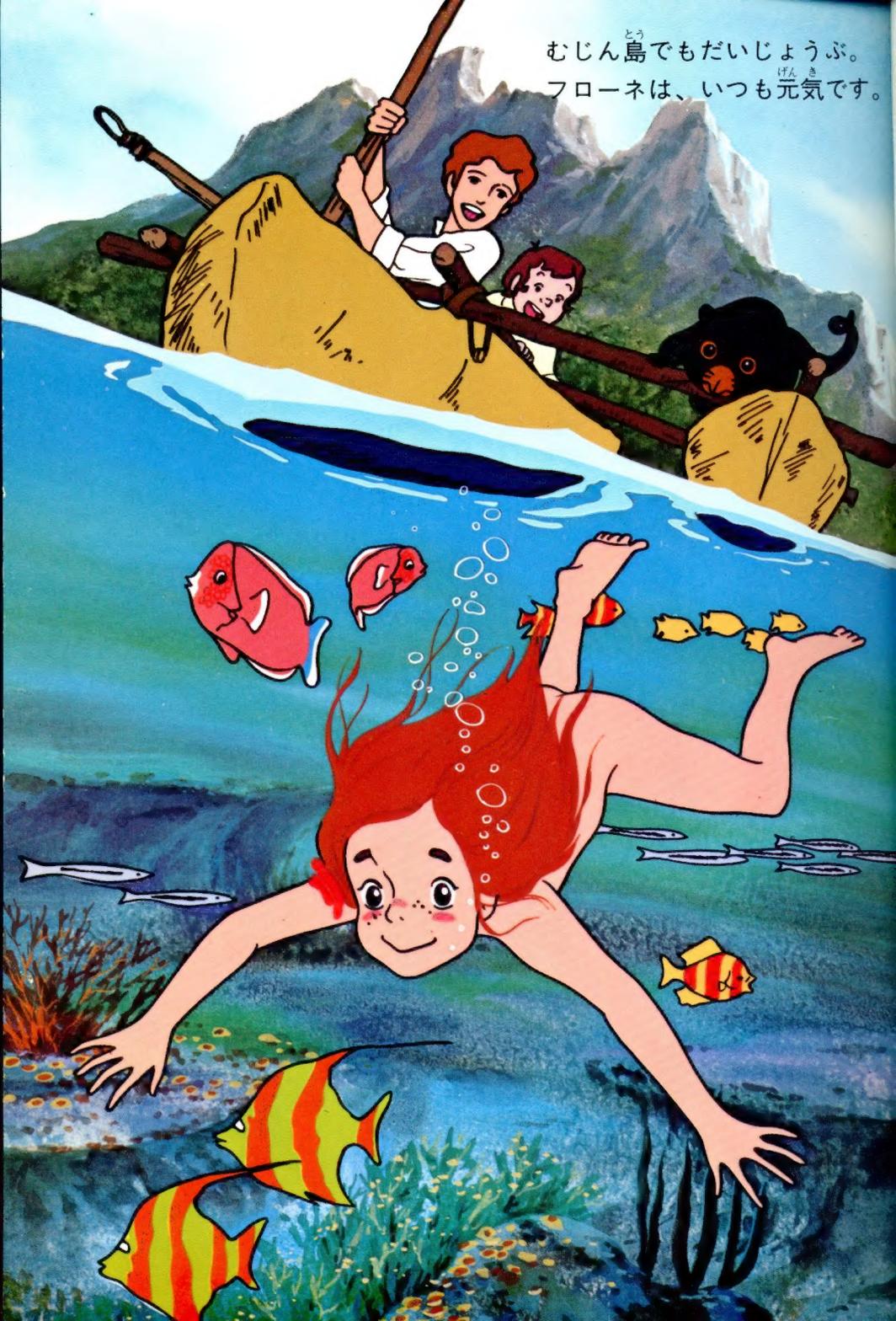
ぶん まつ だ しょうぞう  
文 / 松田昭三



朝日ソノラマ



むじん島<sup>とう</sup>でもだいじょうぶ。  
フローネは、いつもげんき<sup>けんき</sup>です。





みなさんへ

松田昭三  
まつだ しょうぞう

この本は、フローネというとても元気のよい女の子の話です。

フローネは、あまり元気がよすぎて、ときどき大しっぱいをして、そのかわり、ひとがおもいもよらないような、すばらしいことも、つぎつぎにやってのけます。

そんなフローネが、だれもない島へいくことになるのですから、たいへんです。

さあ、どんなことになるでしょうか。わたしはせきにんをもちませんよ。なにしろ、フローネときたら、話をつくったわたしでさえ考えもつかないことを、かっさにやっちゃうんですから。

なに、それはおかしい、あなたがつくった話だらうって？ いえ、本当なんですよ、読めばわかります。



ふしぎな島のフローネ◎もくじ

みなさんへ

1 一通の手紙つうてがみ

2 おとうさんのかつやく

3 こわいあらし

4 島をめざしてしま

5 島のたんけんしま

6 ジャツカル

1

7

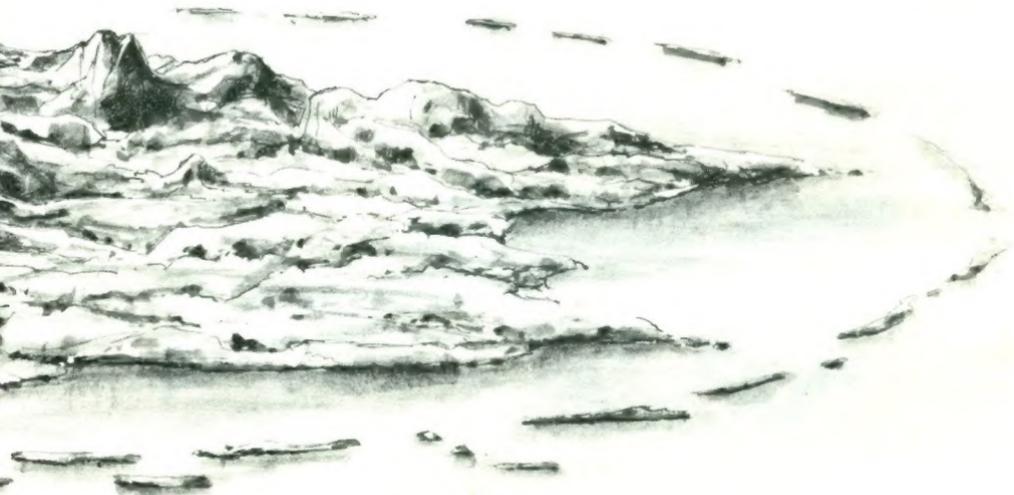
18

30

42

55

67



7 木のおばけ

8 おにいちゃんがあぶない

9 船が見える

10 おにいちゃんのひみつ

11 どうくつの家

12 どろぼうがいる

13 さようなら、むじん島

お母様がたへ

158  147 136 125 114 102 91 78



# このものがたりのなかまを しょうかいします



◀ 一家の中心  
おとうさん



◀ プチクススの  
あかちゃん  
名前はメルクル



▲ 船をつくった老人



▲ やさしい おかあさん



私、フローネ



◀ 私の弟 ジャック



▲ おにいさん フランツ



▲ オーストラリア人の少年



◀ たよりになる  
ジョン

ふしぎな  
島の

# フロローネ

家族ロビンソン漂流記



この本では，原則として，小学校2年までに  
習う漢字を使用し，漢字にはすべて，ふりが  
なをふってあります。

## 1 一通の手紙

フロローネが、にわの木にのぼって、町の通りをながめていると――。

十さいの女の子が、どうして木にのぼるのかって？ それはこういうわけです。

フロローネという女の子は元気がありすぎて、おはじきとか、ままごととか、人形のさせかえとか、おとなしくすわってするような女の子のあそびではものたりなくて、男の子のすることもやってみたいからなのです。

ですから、フロローネは木のぼりどころか、あいてさえいれば、レスリングだってボクシングだってやりたいのです。

フロローネは学校の帰り、さか立ちしてどれくらい歩けるか男の子ときょうそうしたことさえあるのです。

そんなわけで、フロローネは家にいても、たいくつすると、よくにわの木にのぼるのです。

それに、その木はちょうど二かいのフランツのへやのまどのところにのびて、木の上から、

「おにいちゃん、こんにちは。」

と、あいさつすることもできるのです。

フランツは十五さいになる兄で、妹のフローネとはせいかくがまるつきりはんたいで、あまりらんぼうなあそびはしません。スポーツはにが手で、音楽が大すきというおとなしい少年です。

ですから、フローネが木にのぼって、

「おにいちゃん、こんにちは。」

というとき、フランツのほうはたいていまでぎわで、ギターをひいたりフルートをふいたりしています。

この日も、フローネが木にのぼっていると、フランツはまでぎわでギターをひいていて、

「フローネ、おまえ、そんなに高いところまでのぼって、こわくないのか。」

と、おどろいていました。

「ゼーンゼン、こわくなんてないわ。高いところはきもちいいわ。ながめとてもいいし。」

と、フローネは、へいきで答えました。

こんなふたりを見ると、おかあさんはいつもこういつてこぼすのです。

「ああ、フローネが男の子で、フランツが女の子ならいいのにねえ。こまったことだわ。」

さて、フローネが、にわの木にのぼって、町の通りをながめていると、ゆうびんはいたつがフローネの家のほうへ近づいてきました。

ゆうびんはいたつも、木の上のフローネに気づいて、一通の手紙をふって見せました。

「あっ、お手紙。」

そうさげんだとおもうと、フローネはものすごいはやさで、するすると木をすべり

おりました。

二かいのまどから、フランツがさげびました。

「ぼくのところへきたんだ。フローネ、おかあさんに見せないで、まっすぐぼくのところへもってこいよ。」

「はい、お手紙。」

と、ゆうびんはいたつは、フローネに手紙をわたしました。

「ありがとう。」

フローネは手紙のあて名を見ました。それはフランツではなく、おとうさんあてになっていました。

「おあいにく。おとうさんにきたのよ。」

と、フローネは二かいのフランツにさげびました。それから、

「おにいちゃんたら、きつとガールフレンドからでもきたと思っただわ。」

と思つて、おかしくなりました。

ところで、そのおとうさんあての一通の手紙が、一家のうんめいを大きくかえるこ



とになろうとは、その時フローネは思ってもみなかったのです。

フローネがすんでいるところは、スイスのベルン市です。ベルン市というのは、スイスの首都です。そこでフローネのおとうさんは、いしゃをしています。

かぞくは、おとうさんとおかあさんとおにいさんとそれから弟のジャックがいます。そのほかに、お手つだいのマリーがいっしょにすんでいます。

これまで、とくにふじゆうなこともなくすごしてきました。フローネも兄のフランツも、いや、おかあさんだって、このままベルンで、へいわな一生をおくるもの思っていたのです。

ところが、そうではなくなったのです。みんな一通の手紙がげんいんです。

その手紙は、おとうさんがウィーンの医科大学でいっしょに学んだ時の、イギリス人の友だちからきたのです。

そのイギリス人の友だちは、オーストラリアで、やはりいしゃをしていて、オーストラリアでは、いしゃがたりなくてこまっているから、おとうさんにもぜひオースト

ラリアへきてくれるようにと行ってきたのです。

「三十三びき、三十四ひき、三十五ひき、三十六びき……」

さつきからフローネは、ベッドの中でヒツジの数をかぞえています。ねむれないときはヒツジの数をかぞえるとねむくなるというからです。

でも、百びきまで数えても、まだねむくなりません。かえってますます目がさえるばかりです。

フローネは、カンガルーのいるオーストラリアへいけると思うと、こうふんしてねむれなくなってしまったのです。

男の子のようにぼうけんずきなフローネにとって、まだ知らない遠い国へいけることはうれしいことなのですが、ねむらなければならぬときに、どうしてもねむれないのは、とてもつらいことです。

いまはもうま夜中です。家中で、まだねむらないでいるのはフローネだけです。となりのベッドでは、小さいジャックがグウグウ大いびきをかいてねむっています。そ

のいびきがじやまになって、よけいフロローネはねむれません。ジャックの寝顔がにくらしくなってきました。

フロローネは、ベッドから体をのぼすと、カーテンを少しだけあけて、外をのぞいてみました。

外はまっくらです。まだまだ朝までなん時間もあります。

弟のジャックがまだ生まれないうちだったら、こういうとき、フロローネはおかあさんのへやへとんでいって、おかあさんにだかれてねむるのですが、十さいにもなったいまでは、きまりがわるくて、そんなあまえたことはとてもできません。

でもフロローネは、ひとりで目ざめていることにととうがまんができなくなりまして。パジャマのままそっとろうかに出ると、おてつだいのマリーのへやをノックしました。

「マリー、マリー。」

なかで、

「はい、おくさま。」

と、マリーの答える声<sup>こえ</sup>がして、ドアがあきました。

マリーは、おかあさんが用<sup>もち</sup>があつておこしにきたと思<sup>おも</sup>ったのでしよう。おかあさんでなくフローネが立<sup>た</sup>っているのを見て、びっくりしていいました。

「まあ、フローネ、どうしたの。」

「ねむれないの、目がさえて。」

マリーは、いきもちでねているところをおこされたのですが、少し<sup>すこ</sup>もいやな顔<sup>かお</sup>をしないでした。

「そう。じゃ、おはいりなさいな、フローネ。」

そして、フローネがへやにはいると、

「さあ、はやくわたしのベッドにおはいりなさい。ねむれるまでなにかお話<sup>はな</sup>してあげるから。」

といって、自分<sup>じぶん</sup>はパジャマの上<sup>うへ</sup>にガウンをはおって、ベッドのそばにイスをひきよせて、こしかけました。

フローネは、マリーのベッドにもぐりこみました。

マリーのねていたぬくもりが、まだのこっています。まだ小さいとき、おかあさんのベッドにもぐりこんだときと同じです。

「マリー、お話より歌がいいわ。なにか歌って。」

マリーは本が大すきで、いろんな話を知っているのですが、歌もたいへんじょうずなのです。だから、そうじやだいどころのあとかたづけをしながらでも、よく歌っているのです。

そのうつくしい声を聞かたびに、あまり音楽がとくいでないフローネは、マリーがうらやましいと思うのです。

フローネがマリーを大すきなのは、フローネのできないことをマリーができるからかもしれません。

マリーはフローネのようなおてんばではありません。しとやかで、やさしいむすめなのです。

「いいわ。子もり歌をうたってあげるわ。」

そういうと、マリーはしずかに、ということばをひくくしてということですが、

歌いはじめました。

ほかの人はみんなねしずまっているま夜中なので、大きな声で歌うわけにはいきません。

ねむれ

ねむれ

母のむねに

声をおさえてひくく歌うと、マリーの声はいつそううつくしいのでした。

フローネはうっとりききいっているうちに、いつのまにかねむってしまった。

ベッドをフローネにせんりようされたマリーは、床にねなければなりませんでしたが、フローネのやさらかな寝顔を見ると、かえってうれしそうに床にねたのでした。

いよいよオーストラリアへしゅっぱつするとき、フローネがたったひとつかなしかったのは、このやさしいマリーとわかれることでした。

## 2 おとうさんのかつやく

フロローネの一家は、すみなれたベルンの町にわかれをつけて、ライン川を下り、イギリスを回って、オーストラリア行きの船にのりました。

今から百年もむかしのことですから、ひこうきもなければ、船もあまりはやく走れません。ヨーロッパからオーストラリアまでは、船で二か月いじょうもかかります。

みんながそろそろ船のたびにあきてきたころに、ひとつのじけんがおきました。じけんのげんいんは、なんとジャックだったのです。

この船にはオーストラリアのえらいやく人が、おくさんといっしょにのっています。このやく人は、いじのわるい人で、いつもいばっていました。

そのやく人のおくさんのぼうしを、ジャックがいたずらして、海へおとしてしまったのです。

船は走っていますから、海へおちたぼうしは、見る見るうちにうしろへながされて

いって、見えなくなっちゃいましたから、さあ、たいへん。

フローネが、ジャックをかんぱんであそばせていて、ちょっと目をはなしたすきのことです。フローネのせきにんです。

やく人は、子どものジャックやフローネでは話にならないからと、おとうさんをよびつけて、たいそうおこっていいました。

「あのぼうしは、パリでつくった、せかいにたった一つしかないぼうしだ。およいでいってひろってこい。」

船はぜんそくりよくで走っているのですから、たとえ、すいえいのせんしゅでも、そんなことができるわけはありません。

「もうしわけありません。」

おとうさんは、ふかく頭を下げてあやまってから、いいました。

「およいでひろってくるなんて、とてもむりです。どうか、お金でべんしょうをさせてください。」

「お金にはかえられないぼうしだ。ひろってくることでできないのなら、その子をむ

ちて百<sup>ひゃく</sup>べんうて。」

と、やく人はジャックをゆびさしていました。

「この子はまだ小さいので、わるいこととは知らずに、つい、いたずらをしたので、わるぎがあったわけではありません。この子<sup>こ</sup>のかわりに、わたしをむちで百<sup>ひゃく</sup>べんうってください。それでどうかゆるしてください。」

と、おとうさんはいいました。

やく人は、本<sup>ほん</sup>気<sup>き</sup>でおとうさんにそんなむごいことをさせようと思<sup>おも</sup>ったわけではあり  
ません。

ただ、いじわるな心<sup>こころ</sup>から、おおぜいの人<sup>ひと</sup>が見<sup>み</sup>ている前<sup>まえ</sup>で、おとうさんに、はじをか  
かせてやろうと思<sup>おも</sup>ったのです。

そこで、つぎに、やく人はいいました。

「そうしてもよいが、あいにくここにはむちがない。もし、おまえが、わたしのつま  
がはいているくつに、くちづけするなら、ゆるしてやろう。」

「ええ、いたしましょう。」

おとうさんは、すこしもまよわず、やく人のおくさんのあしもとに、ひざまずきま  
した。

ところが、おくさんは、やく人のようにいじわるな人ではありません。おくさんは、  
おとうさんがくつにくちづけしようとするのを、おしとどめていいました。

「そんなことは、なさらないでください。なくなったほうしは、わたしのもので、じ  
ゆじんのものではありません。どうぞ、もうお氣になさらないで。」

おくさんのこのやさしいひとことで、じけんはぶじにおわりました。

おとうさんとフローネばかりでなく、おとうさんにどうしようしていたじょうきや  
くたちも、ほっとしたのでした。

ところで、だんなさまににず、心のやさしいおくさんは、もうすぐあかんぼうが生  
まれそうな、大きなおなかをしていたのです。

それからなん日かして、船でおまつりがありました。船が赤道をこえるとき、赤道  
まつりといって、おまつりをするのが船のたびのならわしなのです。

かんぱんがぜんぶしょくどうになって、マストからマストにはったつなに、いろいろな国の国旗をかざり、おきゃくものりくみいんもいっしょになってダンスをします。とくべつのごちそうと、おさけがたくさん出て、食べほうだい、のみほうだいなのです。

フランスは、船の中で知りあったエミリーという女の子とおどりました。おとうさんはおかあさんとおどりました。フローネはジャックとおどりました。ジャックは小さいけれども男の子にはちがいないのです。

みんながダンスにむちゅうになっているときでした、船長が大あわてとんできて、さげびました。

「どなたか、おいしやはいませんか。どなたか、おいしやはいませんか。きゅうにびょうにんが出たのです。」

「船のいしやがいるだろう。」

と、だれかがいいかえました。

学校とおなじように、船にもいしやがいるものなのです。この船にもいるはずなの

です。

「それが、こまったことに……」

船長は、すまなさそうにいいます。

「いるにはいるんですが、じつは、いまよっぱらっていて、びょうにんをみられない  
ありさまなんです。それでおきやくさまの中に、どなたかおいしやをさがしているわ  
けなのです」

さけずきの船のいしやは、赤道まつりで、ついはめをはずし、いつもよりのみすぎ  
で、べろんべろんによっぱらってしまったのです。

「わたしはいしやです」

と、すぐにフローネのおとうさんがもうし出ました。

「わたしが、すぐにいきましよう。きゅうびょうにんはどこですか。今かばんをとっ  
てきます」

おとうさんは、かばんをとってくると船長にあんないされて、びょうにんのまっ  
ている船室へいきました。

「びょうにんといっても、じつはおさんなんです。それがなかなか生まうまれないで、くるしんでいるのです。みてやってください、先生せんせい。」

と、船長せんちょうがいました。

そこにねてくるしんでいるのは、先日せんじつのじけんでいじわるをしたやく人にんのやさしいおくさんでした。

「おくさま、さあ、あんしんなさい。わたしがきたからには、もうだいじょうぶですよ。」

と、いしゃのおとうさんは、おくさんを元げん気きづけていいいました。

「まあ、あなたがおいしやさん……」

と、おくさんは、くるしみながらもおとうさんの顔かほを見ると、おどろいたようにいいました。

やく人にんのおくさんは、おとうさんのおかげで、ぶじに元げん気きな男おとこのあかんぼうをうみました。



とてもはじめをかいで、どうにもかっこうがつかず、こまりはてたのは、やく人のほうです。

つい先日、みんなの前で、さんざはじめをかかせたおとうさんに、自分のつまとあかんぼうをすくってもらったのですから……。

おくさんは、だんなさまのやく人にむかって、こういってしずかにたしなめました。「あなた、人というものは、いつなるとき、どんなことがおきて、どなたのたすけをかりなければならぬか、わからないのですよ。ですから、ふだんからどなたともなかよくおつきあいをしなければならぬのですよ。これからは、むやみにいじわるしたり、いばったりしないでくださいね。」

おくさんにこういわれると、やく人は、もうなにもいいかえすことができませぬ。ただただ、

「わかったよ、おまえ。これからは心を入れかえて、いばったり、いじわるをしたりしないよ。」

と、やく人は、まるで青なにしおをかけたように、しおれて元氣なくいきました。

「わかったら、先生に、先日ぶれいなことをしたのをおわびして、それからよくおれいをもうしあげなければいけませんわ。」

やく人は、おとうさんの前にりょう手をついて、ていねいにあやまりました。それから、なんどもなんども、

「ありがとうございます。」

と、れいをいいました。

すると、おとうさんはいいました。

「わたしは、いしゃとしてのつとめをはたしただけです。あなたは、よいおくさまをもってしあわせです。」

おとうさんは、もう先日のことには、こだわっていなかったのです。

フローネも、あの時は、いじわるなやく人がにくくてたまりませんでした。今はもう、こだわってはいません。

エミリーやジャックといっしょに、おくさんのところへいき、

「わたしたちにも、あかちゃん見せて。」

と、いいました。

「ええ、どうぞ見てやってちょうだい。」

と、おくさんも大よろこびで、あかんぼうを見せてくれました。それはそれはとてもかわいらしいあかんぼうでした。

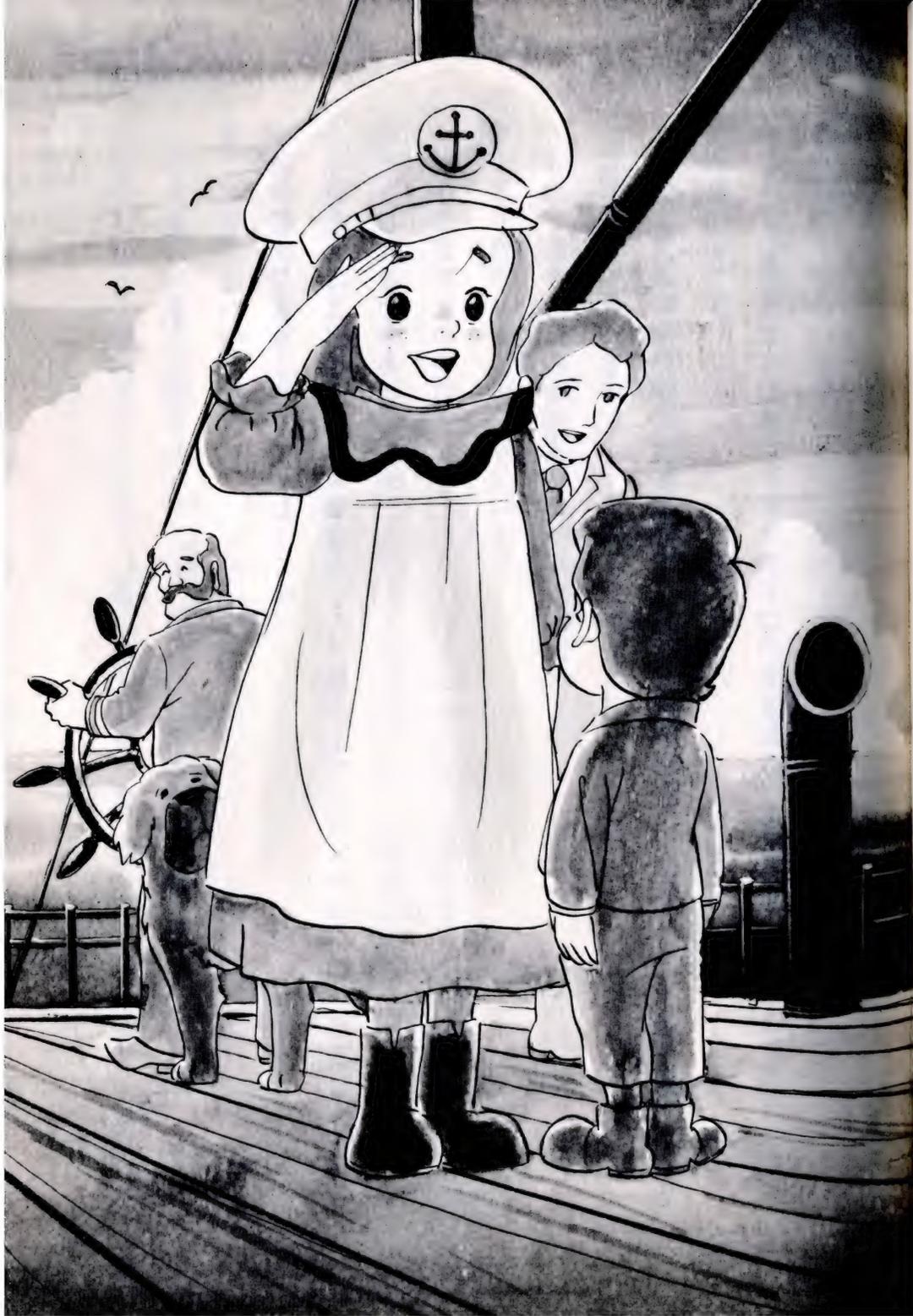
おとうさんのはたらきに、船長はたいへんかんしゃして、それからというもの、

おとうさんばかりか、フランチやフローネとも、したしく口をきくようになりました。

そして、おてんばで少しかわったところのあるフローネに、一日船長や一日コック長をやらせてくれることになりました。

一日船長まではよかったです、一日コック長ではたいへんなことになりました。

フローネは一日コック長になると、つぎからつぎへと自分のすきなりょうりをやらにつくらせて、それを、かたっぱしから食べたのです。よく日は、おなかをこわして、ベッドでうなっていないしなければならなかったのです。



### 3 こわいあらし

長い船たびもあと少しでおわりです。

うれしいことにクリスマスがきました。船の上でクリスマスをむかえるなんて、そぞうしたことがありますか？

じょうきやくの中の子どもたちだけがあつまって、クリスマスのげきをすることにしました。

ぶたいはかんぱんです。

見る人は、おとなのじょうきやくとのりくみいんたちです。

まず、三人の東の国のはかせがとうじょうしました。これはふたりの男の子とひとりの女の子です。

「こんどお生まれになったユダヤの王は、どこにおられますか。」  
と、女の子がいます。

すると、フロローネのヘロデ大王が、おかしな声を出してこういいます。

「なに、あたらしい王が生まれた？ この国の王はわしじゃ。王がふたりになつてはこまる。」

「わたしたちは、そのお方の星が出るのを見たのです。」

と、男の子がいいいます。

「わたしたちは、そのお方をおがみにきたのです。」

と、もうひとりの子がいいいます。

すると、フロローネのヘロデ大王が、またおかしな声でこういいます。

「これ、はかせたち、わしもそのお方をおがみたい。そのお方のおられるところがわかったら、わしにしらせてくれ。」

「はい、おしらせしましょう。」

と、女の子がいいいます。

すると、フロローネのヘロデ大王は、長いしたをぺろっと出して、

「しめしめ、その生まれたばかりの新しい王とやらを、見つけたら、すぐころしてや

る。」

と、いいいます。

この時、べつの男の子が、赤い色紙を星の形に切ったのを、ぼうのはしにつけて、高くかかげながら歩きます。

「あっ！ 星がうごいた。あの星のいくところへついていけば、そのお方がおられるはずだ。」

と、女の子がいいいます。

そして、三人の東の国のはかせは、星について歩いていきます。

星がとまると、その下に、ほんとうの男のあかんぼうをだいたエミリーとフランスがいます。

エミリーはマリアで、フランスはヨセフなのです。そして、イエスは、ついこのあいだ、やく人のおくさんがうんだばかりのあかんぼうです。

「おう、ユダヤの王。」

といって、三人の東の国のはかせたちがイエスをおがみますと、とつぜんそのイエ

すが、

「エーン、エーン。」

となきだしたのには、エミリーがあわてました。

けんぶつせきから、やく人のおくさんがとび出してきて、エミリーからあかんぼうをだきとって、

「イエスさまがないちゃだめじゃないの。」

といったのには、みんな大わらいでした。

みんながたのしくわらっている時でした。ピューッと風の音がしたかとおもうと、パラパラと雨つぶがおちてきたのです。

みんなが、おや、と思つて、空をふりあおぐと、船のほが、強い風をうけてぱんぱんにふくらんでいます。

そして、船が大きくゆれだしたのです。

「あらしだ、あらしだ！」

と、だれかがさげびました。

「じょうきやくのみなさんは船室にはいってください。いそいで船室にはいってください。」

と、船長がいつて回っています。

みんなは、われさきに自分の船室にかけもどりました。子どもたちは、フローネもフランツもエミリーも、げきのいしよのまま走りました。

ゆれがますますはげしくなるので、かいだんやろうかで、ばたばたところぶものもいました。

それからというもの、あらしは五日間もつづいたのです。

じょうきやくは、自分たちの船室にとじこもったきり、一歩もそとへ出ることができません。

フローネのおかあさんは、船よいでベッドにねたままで、おきあがることができま

せん。



おとうさんは、いしゃなので、けが人の手当てを手つだいにいったきり、帰ってきません。

のりくみいんたちは、船がはげしくゆれて、にもつがころがらないようロープでしばったり、船にながれこんだ水をくみ出したり、船のこわれたところをなおしたりで、たいへんです。

つかれてたおれるものや、けが人がつきつきとてます。

マストがおれて、その下じきになった人もいます。

強い風にふきとばされて、海におちたまま、それきりゆくえふめいになった人もいます。

フランツとフロネは、くるしんでいるおかあさんをはげましたり、おびえてなきだすジャックをなだめるのにいっしょうけんめいです。

そのうち、おとうさんがやっともどってきました。なん日もねむらずにけが人の手当てをしていたので、へとへとになっています。どかっとベッドにたおれこんだきり、こんこんとねむりつづけます。

たくさんのけが人が出て、のりくみいんの手がたりなくなると、じょうきやくの中から、わかい元気な人がかりだされました。フランツはすすんで手つだいにいきました。

ころがらないようロープでしばったにもつを、こんどはロープをほどいて海へすてるのです。そうしないと、船がてんぷくしてしまうというのです。

船にひつようなものも、じょうきやくのたいせつなものも、かたっぱしから海へなげこみました。

船長のめいれいですから、だれも、もんくはいえません。

フランツが、かんぱんでもつを海になげこんでいるときです。

ガツガツガツ……という、ぶきみな音がしたかとおもうと、船が大きくかたむきましました。

これまでのかたむきかたとはちがっていました。船の前のほうが、空へつき出るように高くもちあがり、うしろのほうはひくく水の中にしずみ、かんぱんはきゆうなさか道のように大きくかたむいたのです。

かんぱんの上にあつたものは、みんなずるとすべつて海の中へおちます。人間までがすべつておちます。

そうです、かんぱんではたらいっていたフランチも船長も、ほかのおおぜいのりくみいんたちといっしょに、あつというまに、海の中へすべりおちていつてしまいました。

そして、そのままみにさらわれてしまったのです。

船はいつたい、どうなつたのでしよう。

ふしぎなことに、船はひどくかたむきましたが、それきりゆれなくなりましつ。うしろに大きくかたむいたまま、ぴたりとうごかなくなつたのです。

どうやら、船は大きなわの上のりあげたらしいのです。

船のそこにはあながあき、そこからふん水のように海水がはいりこみ、その水がうしろのほうにたまり、そのおもさで、うしろのほうだけが水の中にしずんでしまつたのです。

うしろのほうの船室にいた人は、あつというまに水の中にとじこめられて、しんで

しまったにちがいありません。かわいそうに、イエスになったあかんぼうも、うしろの船室せんしつにいたのでした。

生いきのこった人ひとたちは、じょうきやくも、のりくみいんも、大おおあわてできゅうめいボートにのりうつりました。

フローネたちは、かんぱんへ出でるのがおくれました。

なぜなら、おとうさんはつかれて、まるでしんだようにねむっていたし、おかあさんは船ふねよいで、これまたしんだようによこたわったままで、すぐには立たちあがれなかったからです。

おとうさんがおかあさんをかたでささえ、フローネがジャックの手てを引ひいて、四人にんがやっとかんぱんへ出でたときは、ボートのさいごの一ひとそうが、人ひとをいっばいのせて、船ふねをはなれるところでした。

そのボートにはエミリーもっていました。

エミリーはフローネたちを見みて、

「まって、あの人ひとたちものせてあげて！」

と、かじをにぎっている人ひとにいました。

しかし、ボートにのっているほかの人ひとたちが、口くちぐちにいます。

「だめだ。これでいっばいだ。」

「ひとりぐらいならともかく、四人にんはむりだ。」

「これいじょうのせたら、ボートがしずむぞ。」

「早く出だせ。」

そして、ボートは、かなしいことに、フローネたち四人にんを、かたむいた船ふねにのこして、はなれていってしまったのです。

しかし、ボートでにげたほうがよかったか、それとも船ふねにのこされたほうがよかったか、それはわかりません。

なぜなら、海うみはまだあれていて、小さなきゆうめいボートなど、たちまちなみにのまれそうだったからです。

のこされた四人にんは、その夜よる、ほとんどねむれずに、かたむいた船ふねの中なかですごしました。

ゆれなくなったので、おかあさんの船ふねよいはなりましたが、フランツのゆくえがわからないのが一番ばんのしんぱいでした。

フランツはどうなったのでしょうか。なみにのまれて、それきりしんでしまったのでしょうか。

#### 4 島をめぐらして

フランツは生きていました。

あくる朝、おとうさんが、かんばんに出てみると、あらしは夜のうちに、うそのようにおさまって、海はかがみのようにしずかでした。

そして、かたむいたかんばんの下の方に、なみにうちあげられたようなかっこうで、フランツが気をうしなってよこたわっていたのです。

フランツが気がついてから話したところによると、船長とフランツは、いったんはなみにさらわれましたが、うんよくマストのおれた切れはしが、なみの間にういているのを見つけ、それにつかまって、しばらくおよいでいたのだそうです。

そのうち、船からとばされてなみにただよっていたロープが、船長の足にからみついたので、船長はそれをひろって、マストの切れはしとフランツとをはなれないようにしっかりとむすびつけてくれたのだそうです。

そしてまた大きなみぎきて、船長はマストのうきからひきはなされてしまいました。だが、フランツはマストの切れはしといっしょにういていて、船におよぎもどつただそうです。

おかあさんは、うれしさのあまり、びしょぬれのフランツをだきしめて、なきだしたほです。

もちろん、おとうさんも、フローネも、どんなにうれしかったかしれません。

さて、船はそこにあながあいてかたむいているのですから、いつしずむかわりません。早く、ボートのかわりになるものをつくって、ここからにげださなければなりません。

朝になって、かんぱんから四方を見回すと、そう遠くないところにりく地が見えました。

島です。

五人は——フランツが、ぶじ生きてもどつたので、かぞくぜんいんがそろいました

——力をあわせて、おれたマストやいたきれなどをつかつて、いかだをつくりました。

こぐだけで、ははやく走れないので、みじかいマストを立てて、ほをつけることにしました。

ところが、ためしにいかだを水にうかべて、ほをあげると、走らないで、すぐひっくりかえってしまいました。

そこで、ほが風をうけてもひっくりかえらないように、いかだをささえるうで木を左右につけて、その先に小さなあきだるをつけることを、おとうさんが考えつきました。

そして、フランツが、うで木のざいりょうを、フローネが、小さなあきだるをさがしてくることになりました。

船の中にある小さなたるといえば、ブランデーのたるしかありません。フローネは船のそこへブランデーのあきだるをさがしにいきました。

ひとつはすぐみつけかりましたが、もうひとつついであります。ブランデーがまだすこしの

こっているたるがありました。

どうせ、船はたるごとしずむにきまっているのですから、中みはすててもかまいません。

フローネは、たるの口を下にして、のこっているブランデーをすてようと思いました。しかし、フローネは、もったいないという気がしてなりません。

それで、手のひらにブランデーをうけて、ほんの少しですが、なめてみました。

ツーンとはなにつきささるようなきついあじがして、少しもおいしいとは思いませんでした。

しかし、スーツとするような、いい気もちでもないではありません。フローネは、二ど三ど手のひらにうけてなめました。

フローネがなかなかもどってこないの、へんに思つて、おかあさんが、おさけのくらへいってみました。

すると、どうでしょう、フローネは、二つのあきだるをりょうわきにかかえたまま、

あおむけにたおれて、くるしそうにうなっているではありませんか。なんと、十さいの女の子が、よっぱらったおれていたというわけです。

「まあ、フローネ。」

おかあさんは、びっくりしていいました。

「あなたという人は、まさかブランデーを二たるものんでしまったんじゃないでしょうね。」

「ああ、くるしい。」

フローネは、うめきながら答えました。

「そんなにのんだらしんじやうわ。ほんのひとしずくなめただけよ。ああ、おかあさんが回っている。せかいじゅうがぐるぐる回っている。」

まだ十さいの女の子ですから、ブランデーをひとしずくなめただけで、せかいじゅうがぐるぐる回って見えるほど、よっぱらったのでしょう。

「あきれた。なんてわるい子だろう。」

おかあさんは、かんかんにおこりました。

しかし、おとうさんは、ゆかいそうにこういっただけでした。

「フローネのむてっぽうにはついわらってしまっようよ、みんなが今、生きるか死ぬかのせとぎわにいることもついわすれてね。」

いかだができあがると、これからじょうりくする島がむじん島かもしれないので、くらすのにひつようなものをつみこみました。

食べものとか、いろんなどうぐです。

ロバとニワトリもつれていくことにしました。ロバは、島についてからにもつをはこんでくれるでしょう。

この船には、ほかにもヒツジとかブタとかいろんなどうぶつがのっていました。が、いかだに、それらをみんなのせるわけにはいきません。

さて、すっかりじゅんびができて、いよいよ島をめざしてしゅっぱつというときに、どうしたとか、フローネのすがたがみえませんが、

どこへいったのでしよう。手分けして船の中をさがしました。

「またブランデーをのんでるんじゃないね。」

「だって、おとうさんは、おさけのくらをのぞいてみました。」

「くいしんぼうのフローネが、いきそうなところはきまってるさ。」

「だって、フラッツは船のだいどころをのぞいてみました。」

どこにもいません。

「おかあさんは、船室をひとつひとつのぞいてみました。やはりいません。さいごにどうぶつのいるくらをのぞいてみました。」

いました。

「さあ、うんともってきっておくからね、一どにみんな食べないで、毎日少しずつ食べるのよ。あしたからだれももってきたくないからね。」

「フローネは、どうぶつたちにこう話しかけながら、えさをはこんでやっているのです。」

「これらのどうぶつは、どうせ船といっしょに海にしまってしまううんめいにあるのです。」

けれども、しずむまでの間だけでも、せめておなかをすかさないですむようにというのが、フロローネのおもいやりなのです。

「フロローネ。」

おかあさんは、フロローネをだきしめていました。

「あなたはいい子よ、フロローネ……。さっきはわるい子だといったけど、ごめんさい。とりけすわ。」

一家五人とロバとニワトリとをのせて、いかだはしゅっぱしました。

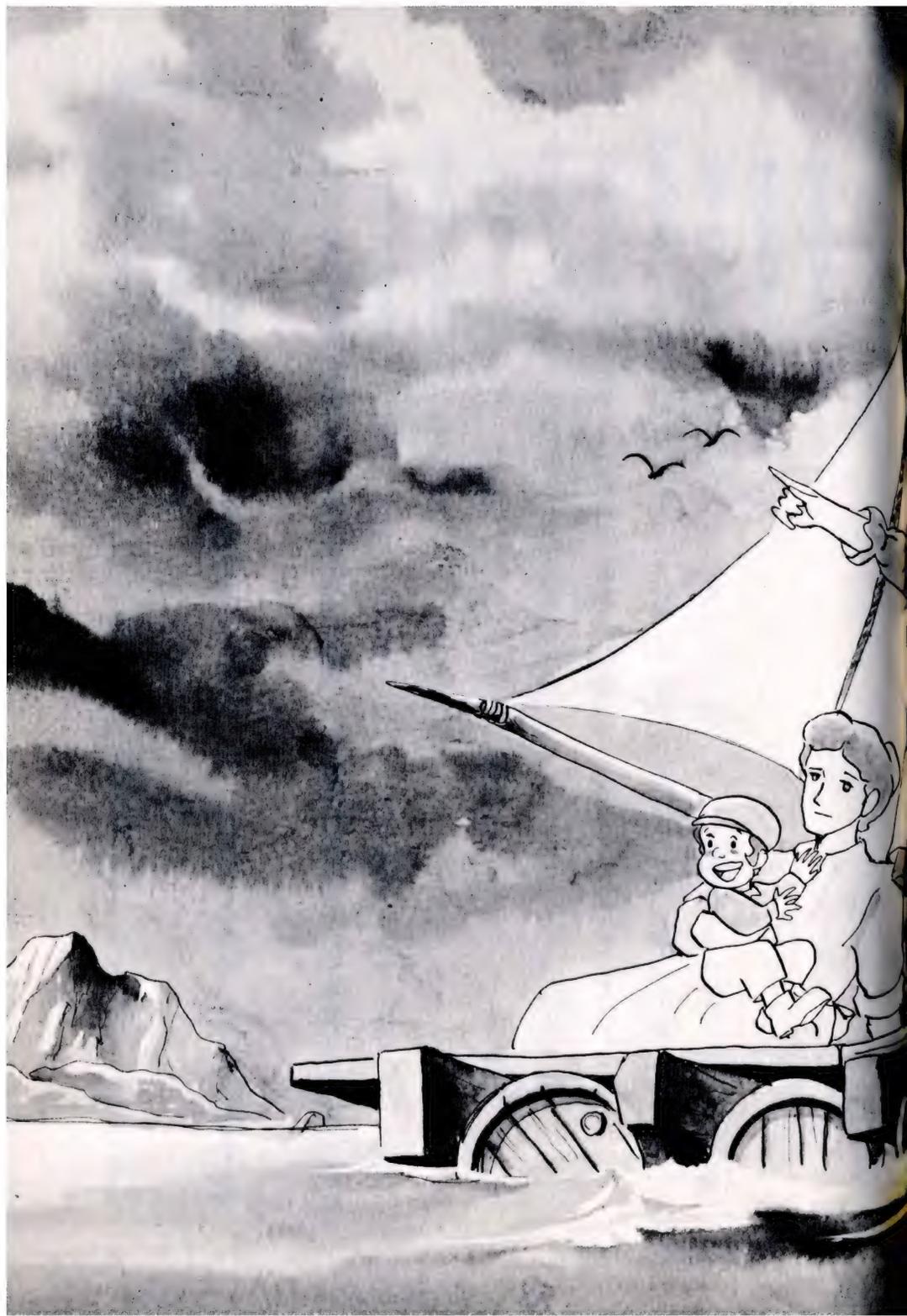
十メートルほど船をはなれたときです。船のほうでとつぜん犬のはげしくほえる声がしました。

見ると、かたむいたかんばんの上を、水ぎわのほうへ、一ぴきの犬が、だんがんのようないきおいで走っています。

「ジョンだ！」

と、フランツがさけびました。





「ジョン、ジョン！」

と、フローネもさげびました。

ジョンは、船長せんちやうがかつていた犬いぬです。フランツやフローネともすっかりなかよしかったのです。

ジョンは水みづぎわまでくると、いかだにむかってはげしくほえました。

ワン！ ワン！ ワン！

それは、つれていってくれといっているのです。

「いかだをかえして！ おねがい。」

と、フローネはおとうさんにたのみました。

しかし、いかだをもう一ど船ふねへもどすひつようはありませんでした。

見るみるまに、ジョンは水みづにとびこんで、いかだにむかっておよぎはじめたのです。

「ジョン、ジョン！」

「がんばって。」

「もう少すこしよ。」

「がんばれ、ジョン。」

みんなでおうえんします。

ジョンがいかだにおよぎつくと、フランチがジョンの前足をもつて、いかだの上へ引き上げてやりました。

「おかしなやつだなあ。いままでどこにかくれてたんだ。」

ほんとうに、ジョンはどこにかくれていたんでしよう。

みんなでいかだをつくったり、いかだにもつをつみこんだりしている間、ぜんぜんすがたを見せなかったのです。

でも、とにかくまにあつてよかったです。出てくるのがあと五分もおそかったら、いかだは船から遠くはなれてしまつて、だれもジョンに気づかず、そのままおいていつてしまつたでしょう。

「よかつたわ、なかまがひとりふえて。」

と、おかあさんがいいました。

犬をひとりというのもへんですが、犬は一番人間と心の通いあえるどうぶつですか

ら、なかまといつてよいでしょう。

いかだは、ひっくりかえることもなく——ひっくりかえったらたいへんですが——  
めざす島しまにつきました。

さあ、はたしてこの島しまは、むじん島とうなのでしょうか。

## 5 島のたんけん

じょうりくしたあたりには、人がすんでいるようすはありません。まず、ねるところをつくらなければなりません。

おとうさんとフランツがテントをはりました。ちょうどキャンプをするときにように。

おかあさんは、ごはんづくりです。やはりキャンプのときのように、川の水をつかい、外で火をたくのです。

フローネとジャックは、たきぎあつめです。これもキャンプのときとまったく同じです。

夜になると、おそろしいけだものがくるかもしれないので、テントのそばにたき火をして、その火をたやさないようにしなければなりません。

けだものは火をこわがって、火のあるところには近づかないのです。

おとうさんとフランツが、こうたいでおきていて、きえないように火の番をするこ  
とになりました。

夜中になりました。テントの中では、おとうさんとおかあさんとフローネとジャッ  
クがねています。

おきて火の番をしているのはフランツです。フランツは銃をかたにかけて、たき火  
のそばをいたりきたりしています。

じつとうごかないでいると、ねむたくなるからです。

銃は、船のそこにたくさんしまつてあったのを、三ちよういかだにつんでもつて  
きたのです。

テントから少しはなれたところに、ロバがつかないでいました。

フランツは、ロバのところまでようすをみにいきました。ロバが、もうじゆうにお  
そわれるといけないからです。

その時です、フランツはやみのなかに、ロバのほかにもう一ぴき、なにかけだもの

がいるのを見ました。

——いえ、見たといっても、ほうせきのように光っているふたつの目を見ただけなのです。

くらいなので、ほかはわかりません。ふたつの目が、光ってうごいていたのです。

「もうじゅうが、ロバをねらってるんだ。」

そう思うと同時に、フラントツは、そのもうじゅうらしいものをねらって、銃のひきがねを引いていました。

ダーン！

手ごたえがあつて、どたりとたおれる音がしました。

銃の音を聞いて、おとうさんとおかあさんがおきてきました。おとうさんも銃もち、おかあさんは火のついたまきをもっています。

おかあさんが、まきの火で、たおれているものをてらして、いいました。

「まあ、クマ！」

「いや、クマではない。」

おとうさんが、そのしんでいるけだものをちゅういぶかく見てから、いいました。

「これは、プチスクスというおとなしいどうぶつだ。めすのようだ。おっぱいが大きいところを見ると、子どもがいるにちがいない。気のどくなことをした。」

「まあ、かわいそうに。」

と、おかあさんも、まゆをひそめていいました。

でも、フランツをせめることはできません。

くらくてよくわからなかったのですから。

ロバを、もうじゅうからまもうと思つて、うったのですから。

その夜の明け方のことです。

テントの中でねむっていたおかあさんが、とつぜん、

「キヤーツ。」

とさけんで、とびおきました。

そのさけび声で、ほかのものもみんな目をさましました。

見ると、おかあさんのねていたところに、なにかいるではありませんか。

「あら、ネコだわ。」

と、フローネがいました。

それは、たしかに子ねこぐらいの大きさのものでした。

ネズミの大きらいなおかあさんは、それをネズミだと思って、びっくりして大声をだしたのでした。

しかし、それは、よく見るとネコでもネズミでもありません。

顔がまん丸で、目がくりくりして、フランツがうちころしたどうぶつをそっくり小さくしたもののなのです。

そうです。もうおわかりでしょう。

それはプクスクスのあかんぼうです。

おかあさんをなくして、まいごになり、あたたかそうなテントにもぐりこんできたにちがいないのです。

それは、とてもかわいらしいどうぶつなのです。子ネコよりも、もっともつとかわ

いらしいのです。

「わたし、かおっと。」

「ぼくがかう。」

プチクスクスをあかんぼうは、とうとうフローネとジャックのとりあいになってしまいました。

どちらにしても、おかあさんをなくしたのですから、だれかがそだててやらなければなりません。

つぎの日、おとうさんとフラントは、島しまのたんけんに出でかけました。この島しまが、どういうところか、しらべるひつようがあるからです。

おかあさんとフローネは、いかだではこんできたにもつのせいをしました。

ジャックはメルクルにむちゅうです。

メルクルというのは、おかあさんをなくしたプチクスクスをあかんぼうにフローネがつけた名前なまえなのです。

プチクスクスのあかんぼうを見つけた日が水曜日だったので、フランス語の水曜日（メルクルデイ）から考（かん）えついた名前（なまえ）です。

「目がくるくるしているから、ぴったりだ。」

といって、みんなもメルクルという名前（なまえ）にさんせいしたのです。

そのメルクルが、夜（よる）になってから、むずかりだしたのです。

それはそれはかなしそうな声（こゑ）を出（だ）して鳴（な）くのです。どうも、おなかをすかしているらしいのです。

でも、プチクスクスのあかんぼうはなにを食（た）べるのかわかりません。

もしかしたら、おとうさんが知（し）っているかもしれないのですが、おとうさんはフラツツといっしょにたんけんに出（で）かけて、いません。

テントには、おかあさんとフローネとジャックしかいないのです。

「あかちゃんなんだから、ミルクならいいわけよ。」

と、フローネがいます。

「でも、ここにはミルクなんてないわ。」

と、おかあさんがいいいます。

「それがあるのよ。」

「どこに。」

「ヤシの実。ヤシの実にはミルクがはいってるんですよ。」

そういえば、テントから海岸ぞいに少しあるいたところに、ヤシの林がありました。

「でも、ヤシの実は高いところになってるのよ。」

と、おかあさんが、がっかりしたようにいいいます。

「ひとつぐらいおちてるかもしれないわ。」

と、フローネがいいいます。

かなしそうに鳴くメルクルがかわいそうなので、夜のくらい中を、おかあさんとフローネとジャックの三人は、ヤシの林へでかけていきました。

すると、どうでしょう。



夜だというのに、ヤシの木にのぼってヤシの実をもいでる人がいるではありませんか。

三人の目の前に、ドサーッとヤシの実がおちてきたので、見あげると、だれかが木のぼっているのです。

でも、よく見ると、それは人間ではなかったのです。

木のぼりのじょうずなサルでもありません。

月の光でよくよく見ると、なんと、それはカニだったので。

大きな大きなカニなのです。大きなカニが大きなはさみで、チヨキンとヤシの実を切りおとしているのです。

カニは、いくつもいくつもヤシの実をおとします。

「カニさんにわるいけど、ひとつ分けてもらいましょう。」  
と、おかあさんが、ひとつひろいあげました。

しかし、かたくてどうしてわったらよいかわかりません。

そこへ、カニが木から下りてきました。

大きなはさみをふりかざしています。おこっているのかもしれない。  
あんな大きなはさみでかかってこられては、かないません。

「にげましょう。」

おかあさんはひろったヤシの実をなげすて、フローネとジャックの手をひいて走り  
だしました。

でも、おなかをすかしてないメルクルのことを思うと、手ぶらでは帰れませ  
ん。

三人はまたひきかえして、ものかげから、カニがヤシの実をどうするのか見  
ていました。

すると、カニはおとしたヤシの実を大きなはさみで、ぱくりとふたつにわっ  
てはありますか。

つぎつぎとわっていきます。

「そら、いまのうちよ。」

おかあさんとフローネは、ぱっと走り出て、わられたヤシの実の半かけずつをもつ

て、こんどはテントまで走りましました。

メルクルはヤシの実のミルクをすって、すっかりきげんがなりました。

「カニさん、気をわるくしたかしら。」

「きつと、かんかんよ。」

おかあさんとフローネは、そういって大わらいしました。

そのカニはヤシガニといって、ヤシを食べて生きているのです。

## 6 ジャツカル

たんけんに出かけたおとうさんとフラッツは、まだ帰ってきません。

三日間のよていで出かけていったのに、三日目の夜になっても帰ってこないのです。「なにかあったのにちがいないわ。がけからおちて足をくじいて歩けなくなったのかしら。それとも、もうじゅうにおそわれて大けがをして、うごけないでいるのかもしれない。」

おかあさんは、つきからつきへとわるいことばかり思いうかべて、しんぱいでたまりません。

「たんけんがおもしろくて、帰るのをわすれてるのよ。」

フローネは、おかあさんをあんしんさせようとはしますが、おかあさんのしんぱいは、時間がたつにつれて大きくなるばかりです。

ねむるところではありません。

そこへさらに、おかあさんを、ますますふあんにさせることがおきました。  
夜中に、ジョンがとつぜんほえはじめたのです。やみの中の、それも遠くのなにか  
にむかってほえているのです。

おかあさんとフローネは、テントの外へ出て、耳をすませました。すると、たしか  
に聞こえるのです。

遠くのほうからですが、犬の遠ほえのようにいつまでもつづく、きみのわるいなき  
声が聞こえるのです。

それも一びきではなく、なん十びきもなん百びきもいるような声なのです。

「オオカミよ、きつと。」

と、フローネがいいいます。

「こんな南の島にオオカミはいないと思うけれど。」

と、おかあさんがいいいます。

さいわい、その夜は遠くのなき声を聞いただけでした。

つぎの日、おかあさんはフローネとジャックに手つだわせて、テントのまわりに、

さくをつくりました。

もし、オオカミのようなもうじゅうのむれがおそってきても、テントまではこないようにです。

その日もとうとう、おとうさんとフランツは帰りませんでした。

そして、その夜、おそろしいことがおきたのです。

ま夜中すぎ、またとつぜんジョンがほえだしたかとおもうと、こんどはほんとうにけだもののむれがおそってきたのです。

それはオオカミではありませんでしたが、オオカミそっくりのジャッカルのむれでした。

見かけがオオカミにそっくりなだけでなく、あらあらしいせいしつもオオカミにとりません。

さくの外は、そのあらあらしいジャッカルのむれにとりまかれました。

なん十ひきいるのかなん百ひきいるのか、くらくてその数はよくわかりませんが、はげしくほえたりうなったりする声から、とてもたくさんいることがわかります。

フロートとジャックは、その声を聞いただけでふるえあがりました。

「こわいよう。」

「こわいよう。」

ふたりは、おかあさんにしがみつきます。

じつは、しがみつかれたおかあさんも、こわくてたまらなかつたのです。

「だいじょうぶ。ちゃんとさくをつくってあるでしょ。さくからははいてこないから、あんしんしてなさい。でも、ふたりともテントから出ないのよ。」

おかあさんは、そういうと、銃をとってひとりテントの外に出ました。

ふたりの子どもにはこわくないような顔をして見せましたが、一步テントの外へへると、銃をもつ手がふるふるふるえます。おかあさんは、これまで銃をつかったことがなかつたのです。

ジョンが、さくの中から外のジャッカルのむれにむかって、はげしくほえたてています。

ワン、ワン、ワン……



しかし、ジャッカルの大ぐんは、イヌの一匹ぐらいなんとも思っていないようです。

はげしくさくにおそいかかってきます。

どすんとさくに体当たりしてくるのがあります。

さくのぼうに食らいついて、はげしくゆさぶるのがあります。

さくに前足をかけて、はいあがろうとするのがあります。

とびあがって、さくをこえようとするのがあります。

さくが高いので、こえることはできず、さくのとちゅうにぶつかってはころがりおちます。

しかし、なかなかあきらめません。遠くから走ってきて、いきおいをつけて、とびこえようとします。

それをなんどもくりかえします。だんだん高くとぶようになります。とうとう頭だけにはさくの上にとどくようになりました。

それを見たとき、おかあさんは、

「ああ、もうだめだ。わたしたちはみんな、ここでジャッカルに食いころされてしま  
うのだわ」

と思いました。

たとえ銃でうってみても、つぎつぎとはいってこられたら、ぜんぶうちころせるも  
のではありません。

銃をもっているのはおかあさんたったひとり。ジャッカルはなん十ぴきなん百ぴき  
といるのです。

さくをこえては行ってこられたら、とてもかないっこありません。

その時、おかあさんにひとつの考えがうかびました。時間をかけてもちこたえるほ  
うほうを思いついたのです。

ジャッカルは、オオカミもそうですが、夜くらいときにおそってきます。そして、  
夜が明けるとひきあげていくせいしつをもっています。朝までなんとかがんばればよ  
いわけです。

おかあさんはテントの中にもどると、五わいるニワトリの二わをつかまえました。

そして、もうふにくるまってふるえているフローネとジャックにいいました。

「けっして外そとをのぞいてはいけませんよ。」

これから、おかあさんがしようとしていることは、子どもには見みせたくないことだったのです。

おかあさんは、ニワトリをだいてテントの外そとに出でました。

そして、ジャッカルがもう少すこしでさくをとびこえそうになったとき、ニワトリをさくの外そとへなげました。

ニワトリは、少すこしはとぶことができます。

でも、あまり高たかくはとべません。それに夜よるは目めが見みえません。

やみくもにただまっすぐ、とんだり走はしったりしながら、しにものぐるいでにげていきます。

それを、ジャッカルがいつせいにいかけます。さくの中なかの人間じんげんのことはわすれて、ニワトリをおいかけます。

やがて、目めの見みえないニワトリはジャッカルにつかまります。ジャッカルは、よっ

てたかって、たちまちのうちにニワトリを食<sup>た</sup>べてしまいました。

それからまた、さくにむかっておそってきます。さくに体<sup>たい</sup>当たりをくりかえします。さくのぼうにくらいついてゆさぶります。

さくをはいのぼろうとします。さくをとびこえようとします。

すると、おかあさんは、またニワトリをさくの外<sup>そと</sup>になげます。

すると、またジャッカルのむれは、さくの中<sup>なか</sup>の人間<sup>にんげん</sup>のことはわすれて、いっせいにニワトリをおそいます。

こんなことは、おかあさんもしたくはなかったのです。ニワトリをジャッカルのえじきにするなんて、見る<sup>み</sup>のもつらいことです。

それを自分<sup>じぶん</sup>でするのは、なおつらいことです。

でも、おかあさんは、ふたりの子<sup>こ</sup>どもをジャッカルからまもるために、それしかほうほうがなかったのです。

おかあさんは、ニワトリをジャッカルのむれの中<sup>なか</sup>になげるとき、  
「ゆるして。」

と、心こころの中でニワトリにいました。

そして、ジャッカルジャッカルのむれがニワトリをおそっているあいだ、しゃがんで顔かほをおおっていました。

こうして、おかあさんは、互たがひわいたニワトリを、のこらずジャッカルジャッカルのえじきにしてしまいました。

それで、だいぶ時間じかんがたちましたが、まだ夜明よあけけにはなりません。

「ああ、どうしよう。もうジャッカルジャッカルをふせぐほうほうがない。こんどこそ、もうだめ。」

おかあさんは、また生いきるのぞみぞみがたれてしまいました。

なん十じゅうぴきなん百ひゃくぴきぴきというジャッカルジャッカルは、たった五ごわのニワトリでまんぞくするはずはありません。力ちからをゆるめることなく、さくにおそいかかってきます。

ついに、ジャッカルジャッカルの一いちぴきぴきが高たかくとびあがって、さくの上うへに前足まえあしをかけました。

「ああ、はいつてくる。」

と思おもったしゅんかん、おかあさんは銃じゆうのひきがねを引ひいていました。

ダーン！

さくの上のジャッカルは、ころりとさくの下へおちてうごかなくなりました。同時におかあさんのほうも、ふらふらとたおれてうごかなくなりました。

おかあさんは、生まれてはじめて銃をうったので、その音とショックで気をうしなってしまうたのです。

でも、うんよく、そのときは夜は明けはじめていました。ジャッカルのむれは、まるで銃の音が合図のように、いっせいに山のほうへひきあげていきました。

## 7 木のおばけ

おとうさんとフランツが、よていより帰りがおそくなったのは、もうじゅうにおそわれたからでも、がけからおちたからでもありませんでした。しかし、さいなんにあつたからであることはちがいません。

帰り道に、広いそこなしぬまがあつて、ふたりとも、うっかりそこへふみこんでしまったのです。

そこなしぬまは、どろのぬまで、水の上には草が生えているので、草原と見分けがつかないのです。

そして、一どそこへふみこむと、人間でも、どうぶつでも、とてもはいあがることのできないのです。

どろの中は、水の中のようにおよぐことができませぬから、もがけばもがくほど、ずるずるとしずんでいってしまうからです。

おとうさんとフランクは、とちゅうでみつけたサトウキビをせおっていたので、サトウキビがうきになって、むねまでしかしずまず、それでなんとかはいあがることのできたのです。

でも、はいあがるだけでもひとくろうで、ずいぶん時間がかかりました。それから、そこなしぬまがどこまでつづいているかわからないので、回り道をしなければならなくなりました。

それで、よていどおりに帰ることができなかったのです。

おとうさんとフランクは、テントのそばまで帰ってきて、血のついたニワトリのはねが、そこらじゅうにおちているのにびっくりしました。

つぎに、出かけるときにはなかったさくがあるのにおどろきました。

そして、そのさくのそばに、ジャッカルが一匹しんでいるのをみつけて、もっとおどろきました。

でも、おどろきはそれだけではまだすまなかったのです。

さくの中へは行って、もっともとおどろきました。なぜなら、そこにおかあさん

がたおれていたからです。

そして、そばには銃がおちています。

おとうさんもフランツも、てっきりおかあさんは、しんでたおれているのだと思っ  
たそうです。

でも、

「アンナ、アンナ」

と、おとうさんが、おかあさんの名をよんでだきおこすと、おかあさんは、ぱっちり  
と目をあけて、こういいました。

「まあ、あなた。いつお帰りになったんです」

そこへ、おとうさんの声を聞いて、テントの中からフローネとジャックがとび出し  
てきました。

こうして、五人のかぞくが、ふたたび、ぶじにあえたのでした。

たんけんから帰ったおとうさんとフランツの話では、どこにも人間のいるようすは

なかったそうです。やはり、むじん島なのです。

たんけんにてかけたさいしよの夜、おとうさんとフランツも、ジャツカルのむれに出あったそうです。

でも、ふたりは木のえだの上に、鳥のすのようなねどこをつくって、その上にねていたので、おそわれずにすんだのです。

そこで、夜は、ジャツカルがおそってきてもだいじょうぶなように、木の上に家をつくって、その中にねるのが一番よいということになりました。

みなさんは、きつと、木の上はどうやって家をつくるのかな、とへんに思うでしょうね。

鳥のすのような家ならつくれるでしょうが、かぞく五人が楽しくねられるような、人間の家らしい家を、どうして木の上につくったりできるでしょう。

ところが、この島には、高いところに家をつくるのにぴったりのおあつらえむきの木があったのです。

それは、なんとという木か、だれも名前を知りません。もの知りのおとうさんでさえ

知りません。

スイスでは、見たことも、話に聞いたこともない木なのです。

それは、どんな木かというと、そうですね、「木のおぼけ」といったらぴたりするような、そのほかにはいいようのない、とってもかわった、おかしな、そして、はじめて見るときは、きみがわるいような、こわいような、ほんとうにおぼけのような木なのです。

その木は、一本の木なのに、みきが十本にも二十本にも分かれているのです。

「分かれているのは、みきではなくて、えだなんだ。」  
と、みなさんはいうでしょう。

ところが、この木は、ほんとうにみきが分かれているのです。

いい方をかえてせつめいしますと、この木は、土のところで十本にも二十本にも分かれて生えているみきが、とちゅうでくつつきあって一本になっていのです。そして、そこから上では、またなん十本にも分かれてのびているのです。

上のほうのは、えだといってもいいでしょう。でも、下のほうは、いくら分かれて

いても、えだとはいえません。

それは分かれて土へもぐっていつているのですから、根といったらいいかもしれません。

でも、根がそんな上から生えているというのもおかしいことです。

根のようなみき、というのが一番当たっているでしょう。

とにかく、そんなへんな木なのです。

そのおばけのような木の、なん本ものみきがくっついて一本になっていたりところから上のえだを少しきりはらえば、その上に五人がはいれるくらいの家ができそうなのです。

おとうさんとフラッツが、そこに家をつくりにかかりました。

ざいりようは、いかだです。いかだをばらばらにして、木の上にはこびあげるのが大しことです。

なん日もかかりません。

おとうさんとフランツが木の上の家づくりにいっしょうけんめいになっているあいだ、こんどは、おかあさんとフローネとジャックがたんけんにかけてました。

たんけんといっても、おとうさんとフランツのように、なん日もとまりがけていくのではありません。

一日でいってもどってこられる、近いところへいくのです。

ピクニックといってもいいようなものなのですが、近くても、まだだれも人間のいなかったことがない未知の土地へいくのですから、やっぱりたんけんです。

おかあさんは、はたけになりそうなところをさがすのがもくてきです。フローネとジャックは、おもしろいあそびばをみつけるのがもくてきです。

おかをひとつこえると、あまり石ころのない、はたけになりそうな、たいらな土地がありました。

「ここがいいわ。ここをたがやして、はたけをつくりましょう。カボチャやトウモロコシを。」

おかあさんは、すっかり気にいったようです。

おかあさんは、オーストラリアへいったらやさしいばたけをつくるつもりで、いろいろなたねを、にもつにいれてもってきていたのです。

このたいらな土地の近くに森が見えました。フロローネとジャックは、そっちへいきたくてしかたがありません。

「早く、あっちへいこうよ。」

フロローネとジャックは、おかあさんを森のほうへせきたてます。

森の入り口に、赤いうつくしい花がさいていました。南洋の島にはあまりたくさん  
のしゅるいの花はないようですが、そのかわり、どの花も、目のさめるようなあざや  
かな色をしています。

三人は、むちゅうで花をつみました。

それから、つんだ花で、首にかけられる花わや、頭にのせる花のかんむりをつくりまし  
た。

「ああ、おなかすいた。」

と、フロローネがいます。





いつでも、まっさきにおなかですくのはフロローネなのです。

「そろそろおひるにしましうか。」

と、おかあさんがいったときです。

「あっ。」

と、フロローネがさけびました。

おべんとうのつつみが、おいたところにはないのです。

森もりの中で、ガサゴソ音かどがします。

見みると、一ぴきのサルが、おべんとうのつつみをもっていくところなのです。

「こら！」

フロローネはすぐおいかけました。

でも、手ておくれでした。サルは、するすると木きにのぼりました。

木きの上うへには、ほかになんびきもサルがいて、おべんとうのつつみは、つきつきとサルの手てから手てへ、あるいは手てから足あしへ、さらには足あしからしっぽへとわたされ、そのサルたちがまた、えだからえだへととびうつって、見みるまにおべんとうのつつみはどこ

かへきえてしまったのです。

「こら、おべんとうをかえせ！」

と、ジャックもさげびましたが、むだでした。

三人は、おべんとうがなくなったと知ると、なんだかよけいにおなかがへったようにかんじました。

「どうしよう。帰る元気もないわ。」

と、フローネがなさけない声を出します。

「おなかすいたよう。」

と、ジャックはいまにもなきだしそうな声を出します。

この時、おかあさんが、おどろいた声をあげました。

「まあ、メルクル！」

メルクルが、なにか食べているのです。

メルクルは、いつもジャックにだかれたり、かたにのったりして、ジャックにくっついていますが、三人が花をつんでいる間、ジャックからはなれて、そのへんを

ひとりだとび回っていたのです。

そのメルクルが、なにかりよう手にかかえて、おいしそうに食べているのです。よく見ると、それはパイパイです。

「まあ、パイパイだわ。」

「きつと、この近くになつてるのよ。」

三人が近くをさがすと、パイパイは、すぐみつかりました。

それも、あるわあるわ、三人がいくら食べても食べても食べきれないほど、なつてるではありませんか。

おかげで三人は、おべんとうをサルにとられてしまつても、ひもじいおもいをしないですんだのでした。

8 おにいちゃんがあぶない

家をつくったり、やさいをつくるはたけをさがしたりはしましたが、それは先さきの用心のために、おとうさんもおかあさんも、この島にずっとすみつくことにきめたわけではありません。

一生むじん島でくらすために、すみなれた国を出てきたのではありません。早くもくてき地のオーストラリアへいかなければなりません。

そのためには、島の近くを船が通るのをまって、のせてもらわなければなりません。そして、のせてもらうためには、船の人が気づいてくれるように、船が見えたら合図をしなければなりません。

そこで、海からよく見えるおかの上に、みんなでまきをはこびました。船が通るのが見えたら、いつでもすぐ火をたけるようにするためです。

船の人が、島にけむりがたちのぼっているのを見れば、島に人間がいるとわかるか

らです。

それから、おかの上に、はたも立てました。

火をたくのがまにあわなくても、はたを見て、気がついてくれるかもしれないから  
です。

一日になん回もおかの上にのぼって海を見わたすのが、フランツとフローネのやく  
めになりました。

しかし、くる日もくる日も、さっぱり船はすがたをあらわしません。海はどこまで  
も青一色で、船らしい黒いものも白いものも見えません。

船がなかなかこないとなると、しばらくは島でくらすかくごをしなければなりません。  
ん。

木の上の家はできあがりしましたが、いかだではこんできたしよくりようがだんだん  
とぼしくなってきました。

チーズはすぐに食べてしまいました。ほしにくもなくなりました。

ほしくがなくなったら、ころして食<sup>た</sup>べるつもりだったニワトリは、ジャッカルのエジキになってしまいました。

ヤシやパイヤのみはいくらでもあります。しぜんになっているのを、ただとってくればよいのですから、かんたんです。

でも、いしゃのおとうさんはいうのです。

「毎日<sup>まいにち</sup>、そんなものばかり食<sup>た</sup>べていては、えいようがかたよって、びょうきにかかりやすくなる。」

そこで、おとうさんとフラんツは、しんせんなくが食<sup>た</sup>べられるように、かりに出<sup>で</sup>かけることにしました。

もちろん、ジョンがおとします。

もうひとり、おともするといつてきかないものがいました。フロローネです。

「女<sup>めなこ</sup>の子<sup>こ</sup>は、かりになんかいくものじゃありません。」

と、おかあさんがいいましたが、フロローネはまけていません。

「おかあさんだって、ジャッカルをうったじゃないの。わたしだって、いつ銃<sup>とち</sup>をうた

なければならぬ時があるかわからないわ。そのれんしゅうよ。」

これには、おかあさんもかえすことばがありません。ジャッカルにおそわれたあの夜、フローネがフランツのように銃をうつことができたらと、おかあさんは思ったからです。

「そんなにきたかったら、ついてくるさ。」

と、おとうさんがいいました。

ゆるしがでたのです。

「ぼくもいく。」

と、ジャックもいいでしたが、これは、おとうさんもおかあさんもゆるしません。

三人はそれぞれ銃をもってでかけました。ジョンがいさんで先をいきます。

森では、サルと小鳥しか見かけませんでした。

「ウサギかヤマドリでもいるといいんだが。」

と、おとうさんがいいました。

「ぼくはイノシシをしとめたいな。」

と、フランツがいました。

「わたし、サルにしかえしをしてやりたいわ。このあいだ、おべんとうをとられてしまったの。」

と、フローネがいました。

すると、おとうさんが、きびしい顔かおをしていました。

「サルなんかうつんじやない。」

フローネも、サルをころしたいとは思おもいません。ただちょっと、むねのすくようなしかえしをしたいと思おもっただけなのです。

「エイ！」

フローネは小石こいしをひろって、木きの上うえのサルになげつけるだけですがまんしました。それも、当あたらないうように、わざとまとはずしてなげたのでした。

すると、どうでしょう。

サルのむねは、おどろいてぱつとにげちるかと思おもうと、そうはしないで、ぎやくに

三人にむかって、いっせいに石をなげかえしてきたのです。

「いててて。」

三人は、あわてて、しゃがんで頭をかかえました。

「フローネが、よけいなことをするからだ。」

と、フランツがおこっていいました。

それにしても、木の上のサルが、どうして石をもっていたのでしょうか。じつは、それは石ではなかったのです。

ばらばらとおちてくるものを、おとうさんがひとつひろって見て、いいました。

「おや、これはココヤシの実だ。」

サルのむれがのぼっていた木は、ココヤシの木だったので。

「しめしめ。『たなからぼたもち』とは、このことだ。」

と、こんどはおどりあがってフランツがいました。

「ハハハ。これがサルまねだ。」

と、おとうさんがわらっていいました。

サルたちは、フローネが小石をなげたのを見て、まねしてココヤシの実をもちで、なげかえしたのです。

おかげで、三人は少しいたい目にあいましたが、なにもしないで、たくさんのココヤシの実を手にいれることができたのでした。

これでフローネは、思わぬよいことに、むねがすつとしたのでした。

そして、もうサルをにくいとは思わなくなりました。友だちになってもいいと思っただけです。

森をぬけると、草ぼうぼうの野原に出ました。人間のせいよりも高い草が、あたりいっばいに生えています。

「なにかいそうだな。」

と、おとうさんがいいます。

ジョンが、まっさきに草に分け入ります。

「ジョン、まで。」

フランツとフロローネがおっていきます。ジョンの足が早いので、ふたりも走るよう  
においかけます。

「うっかりふみこむんじゃない。」

と、うしろから、おとうさんがいます。

しかし、ふたりにはもうその声こゑがとどきません。ジョンについて、どんどんすすみ  
ます。

おとうさんは、また、そこなしぬまにでもふみこんだらたいへんだと思おもったのです  
が、ここにはそこなしぬまはないかわりに、べつのきけんがまちうけていたのでした。

ジョンが、なにかをかぎつけて、ワンワンとほえたときは、もう手ておくれでした。

ジョンのほえる声こゑにおどろいて、ふかい草くさの中にねそべっていた水牛すいぎゅうが、ぬっと立た  
ちあがったのです。

そして、それは一頭ひとづかや二頭ふたづかではありません。むれをつくっていたのです。

「あつ。」

と、フランツがさげんだときは、フランツもフロローネも水牛すいぎゅうのむれの中なかにいたのです。

しかも、おとうさんは、遠くにいます。

「おとうさん！」

と、フロローネは、ふるえる声でさげびました。

「フロローネ！」

おとうさんの声がかえってきませんが、大きな水牛にへだてられてすがたは見えませ  
ん。

「フロローネ、うごくんじゃない。じっとしてるんだ。」  
と、フランツがいます。

ふたりが水牛をおこらせないよう、なにもしないでじっとしていれば、水牛のむれ  
はやがてゆっくり歩きさるだろう、とフランツは思ったのです。

しかし、いつでも銃をうてるようにかまえています。

フロローネのほうは銃をかまえるどころではありません。

あまりのおそろしさに、銃をとりおとしたことにも気づかず、ただ、がたがたとふ  
るえています。

水牛はふたりを見ても、見えないような、知らん顔をしています。

一步前へ出たり、一步うしろへさがったり、のろのろとうごいています。

そのまま長い時間がたったようにふたりは思いました。しかし、しずかだったのは、ほんのいっしゅんだけだったのです。

ワン、ワン、ワン！

ジョンがまたほえました。そして、むてっほうにも、ジョンは水牛の一頭にとびかかったのです。

これではたまりません。おこった水牛は、かかってきたジョンではなく、一番体の大きいフランツめがけてとっしんしてきました。

フランツはひきがねを引きました。

ダーン！

この音で、ほかの水牛はいっせいににげりましたが、おこった水牛は、少しもひるまず、フランツのすぐはなさきにせまってきます。

たまがはずれたのです。さあ、たいへん……。



## 9 船が見える

「おにいちゃん、にげて！」

というフローネの声をきくより早く、フランツは、銃をすててかけだそうとしました。でも、なんということでしょう。

「あっ。」

フランツは、自分ですてた銃につまづいたのです。一歩もにげないうちにころんてしまったのです。

ですが、これまた、なんということでしょう。つまづいてころんだのがよかったのです。

フランツのむねをめがけてつっこんできた水牛は、フランツがたおれたために、いきおいあまって、フランツのたおれた上をとびこえてしまったのです。

そして、そのしゅんかん、

ダーン！

と、銃声（じゆうせい）がひびきました。おとうさんがうったのです。

はじめの銃声（じゆうせい）でほかの水牛（すいきゆう）がにげちったので、フランツをおそっている水牛（すいきゆう）がおとうさんにも見えたのです。

フランツの上（うえ）をとびこえた水牛（すいきゆう）は、フランツの頭（あたま）から二メートルも先（さき）にどさりとおちて、そのままうごきません。

おとうさんが、きゆうしよに一発（いっぱつ）で当てたのです。

「わあ、おとうさん、すごい。」

フローネは、おどりがりました。ばんざいとさけびたいくらいでした。

おにいちゃん（おに）がたすかったばかりでなく、三人（さんにん）がかりでもとうていもち（もち）はこべない、大きなえものをしとめたのですから。

三人（さんにん）は、水牛（すいきゆう）のにくの一番（ばん）やわらかくおいしそうなところを、もてるだけもって、元氣（げんき）よく、かちほこって家（いえ）に帰（かえ）りました。

そのばんは、みんなが大きなステーキ（ステーキ）にありつけたことはいうまでもありません。

そして、のこったには、長もちするようにおかあさんがおづけにしました。

かりは、おわってみれば大せいこうでしたが、いいことばかりだったわけではありません。

よく日、フランクは足がいたいといいだし、歩けなくなりました。

水牛におそわれてあわててころんだとき、足をどうかしたらしいのです。

そのときは、こうふんしていたためか、いたいとかんじなかったのですが、一日たつと、赤くはれあがって、かた足で立つことはできませんが、いたいほうの足はじめにつけることもできないくらいです。

すぐに、おとうさんが手当てをしました。

「なに、くじいただけだ。三日もすればもとどおりになる。」  
と、おとうさんはいました。

でも、かぞくがひとりでもうごかないでねているというのは、なんとなくゆううつなものです。

このむじん島では、ほかに人がいないのですから、なおさらです。

「ああ、つまらないなあ。」

フローネが、ふるさとの町ベルンを出てから、はじめてぼやきました。

こんなときは、ふるさとがこいしくなります。ホームシックです。

ここにはともだちもいなければ、学校もない。図書館もない。げきじょうもない。

店屋もない。なんにもない……。

フローネは、なにもする気がしません。

おとうさんとおかあさんは、おかの下のたいらなところで草や木に火をつけてやいています。

たがやしてはたけにしたいと、おかあさんがいついたところでは。

たがやすどうぐがないので、生えている草や小さな木をやいて、そのあとにぼうであなをあけて、やさいのたねをまくのだそうです。

「やけた草や木のはいがこやしになって、やさいがそだつ。大むかしのうぎょうのやりかただ。」

と、もの知りのおとうさんがいいいます。

「どんなさくもつができるか見ものだわ。」

と、フローネは手つだいもしないで、つい、にくまれ口をききます。

ホームシックで、ごきげんがわるいのです。

「見はり台へのぼって見なさい、ジャックをつれて。」

と、おかあさんがいいいます。

見はり台というのは、船が通るのが見えたら火をたくよういをしてある、おかの上のことです。

そういえば、きょうは、フランツがねているので、まだ見はり台へ一どもあがって見えていないのでした。

「どうせ、むだよ。船なんかきやしないわ。」

と、またフローネは、にくまれ口をききます。

「とにかくあがってみなさい。みはり台の上は、そよ風がふいてきもちがいいよ。」  
と、おとうさんがいいいます。

「ジャック、おいで。」

フローネは、しぶしぶジャックをつれておかにのぼりました。  
すると、どうでしょう。

「あっ。」

フローネは、おもわずとびあがりました。  
遠くの海に船らしいものが見えるのです。

「ジャック、まってるのよ。」

という、フローネは、ころがるようにおかをかけおりました。

「おとうさん、船が、船が……早く……」

フローネは、みなまでいわず、また、おかをかけのぼります。

「なに、船。」

「ほんと、フローネ。」

おとうさんとおかあさんも、とぶようにおかにのぼります。

「ほんとだ。船だ。」

「まあ、やっと帰れるのね。」

船は、だんだん近づいてきます。

「さあ、火をたきましよう。」

「下で草をやいていてよかった。うまいことけむりがたっている。しかし、ここでも火をたこう。」

さっそく、まきに火をつけました。

「さあ、はたもふるんだ。」

フローネは立ててあるはたをぬいて、うちふります。

「銃をとってきて、空にむけてうってみよう。音で気がついてくれるかもしれない。」

おとうさんは、銃をとりにもどりました。

すると、どうでしょう。足のいたいフランツまでが、船が見えるときいて、おとうさんのあとをおってくるではありませんか。

かた足でびよんびよんとんだり、りょう手をついてはったりしながら。

一家五人ぜんいんがおかの上に立って、船にむかってさけびました。

「おーい！」

「おーい！」

「ここだ！」

「ここよ！」

「早くきて！」

フローネとフランツが、ふたりがかりではたをふります。

おかあさんは、火にどんだんまきをくべます。

おとうさんは、空にむけて銃をうちます。

しかし、なんとということでしょう。

船は、たしかに近づいてくるところだったのに、もういちどよく見ると、ぎやくに

遠ざかっていくではありませんか。

つまり、船は東のほうからあらわれて、島のおきを通って、こんどは西のほうへさ

つていくのです。

島のおかの上で火がたかれているのも、人がはたをふっているのも、銃をうって

るのも、気づかずに。

「おーい！」

「おーい！」

「まって！」

「こっちだ！」

「もどって！」

五人がよべどさけべど、船は、かなしいことに、ますます遠ざかっていきます。そして、やがて黒い点のように小さくなってしまいました。

「ああ、いつてしまった。」

フローネが、まずそのばにへたりこんで、なきだしました。

「どうして気がついてくれないんだろう。」

フランツも、わすれていた足のいたみがきゅうにもどってきたように、そのばにすわりこんでしまいました。

「あいにく、だれもこちらを見ていなかったのかねえ。」



と、おとうさんも、あきらめきれないようになっています。

「見てなくても、音は聞こえたはずよ。」

と、フローネが、おこったようにいいます。

「いや、音はねかえるものがない海の上では、銃の音も、あんがいとどかないのかもしれない。」

と、こんどはおとうさんも、すっかりあきらめたようにいいます。

「そんなにがっかりしないで。」

おかあさんだけが、元気にみんなをはげましています。

「船はまたくるわ。これで、船の通る道が島からそんなにはなれていないってことがわかったんですもの。のぞみがでてきたわけよ。」

「そうだ。」

おとうさんが、気をとりなおしていいました。

「おかあさんのいうとおりだ。きぼうをもつこと、それがたいせつだ。このつぎは気がついてくれるさ。いまのは、オーストラリアからヨーロッパへ帰る船だろう。この

つぎは、ヨーロッパからオーストラリアへいく船ふねが通とおるにちがない。それにのせて  
もらうほうがいいよ。」

これは、まけおしみでした。

みんなが、がっかりしたことことに、かわりはなかったのです。

## 10 おにいちゃんのひみつ

このごろ、フランツは朝ごはんがすむと、ふらりとどこかへ出かけていきます。

「フランツ、どこへいくの」

と、おかあさんがきくと、

「うん、その、ちょっと……」

と、いいかげんなへんじをします。

「『ちょっと』が、お昼まで帰ってこないじゃないの。お昼がすめば、また『ちょっと』  
なんでしよう。」

「うん、そう、ちょっとなんだよ。」

いったい、なにがちょっとなのか、さっぱりわかりません。

フローネは、気になってしかたがありません。で、ある朝、フランツが出かけていくのを、あとからこっそりつけていきました。

ところが、いくらもいかないうちに、かんとんにまかれてしまいました。

フランツは森へは行っていったのですが、大きな木のかげになったとおもったら、それきりすがたが見えなくなったのです。

フランツは、気がつかないふりをしていましたが、ほんとうは、ちゅういぶかくうしろに気をつけていて、フローネがつけていることを知っていたのです。

それで、大きな木のそばにくと、すーっとその木のかげにはいり、フローネがその木までくるまえに、もうつぎの木のかげにうつり、そしてフローネがうろうろしているあいだに、またつぎの木のかげへ、そのまたつぎの木のかげへと、つぎからつぎと木のかげにかくれながら、フローネがさがしているのははんたいのほうに走りさっていたのです。

「やっぱり、なにかかくしてる。おにいちゃんにはひみつがあるんだ。」

そうひとりごとをいいながら、フローネは、むなしくひきかえすよりほかありませんでした。

フランツときたら、ほんとうにひみつずきなのです。

木の上きの上に家いえをつくったときも、そうでした。

木の家きいえができあがると、そこらなわばしごを下さげて、のほりおりするようにしたのですが、夜よる、みんながあがってしまつと、そのなわばしごを上うえへひきあげてしまつます。

みんながねむっているとき、だれも（といつても、この島しまには、ほかにはどうぶつしかないのです）あがってこれられないようにするためです。

そして、朝あさになってまた外そとへ出でるときは、なわばしごを下さげます。つまり、そのなわばしごがないと、だれも木の上きの上の家いえに出入りでいりできないのです。

ところが、フランツときたら、手てじなみたいに、なわばしごをつかわないで、たいたい木の下きのしたにいたとおもつたのに、あつというまに上うえの家いえにあらわれ、またぎやくに、たつたいま上うえの家いえにいたとおもつたら、あつというまに家いえの下したのじめんにおり立たっているのです。

「まあ、フランツ、あなた、はねがあるの。」

おかあさんは、しんじられないという顔をしました。

「木のみきをのぼれるわけではないし……」

フローネも、首をかしげるばかりです。

家をつくるまえに、上のえだを切りはらうため、おとうさんとフランツが、まずはじめに木の上にあがった時でした。

みきをのぼることはできなくて、ロープのはしに石をつけて、それをなげあげてえだに通し、そのロープにぶらさがって、木の上にあがったのです。

今ではそのロープもありませんから、フランツはまほうつかいとは思えませんでした。

ところが、おとうさんだけは、少しもおどろかないで、にやにやしているので、そして、いいました。

「フランツ、そろそろたね明かしをしてはどうかね。ひみつをフローネにさがし当てられたら、くやしいだろう。」

「ハハハ。教えてやるか。」

そういうと、フランツは、家の床の下になっている大きな木のみきの根元をあけたのです。

木の根元をあけるといのは、ちょっとおかしいでしょう。あけるのはドアとかふたです。

そうです。この木のみきの根元が、ドアになっていたのです。

そして、そのみきの中は、大きなパイプのようにならなくなったのです。

さらに、その中に、木のはしごがとりつけてあったのです。

おとうさんとフランツは、おかあさんとフローネとジャックが近くをたんけんして歩いてるあいだに、木の上に家をつくりながら、そんなさいくをしていたのです。

もっとも、みきの中は、しぜんにくさってつつになつたので、おとうさんとフランツがしたのは、中に木のはしごをつくってとりつけるのと、根元を四角に切りぬいて、ドアにすることだけだったのですが……。

そして、おかあさんやフローネをおどろかしてやろうと、しばらくこのしかけをだまっていようといいたしたのは、フランツだったのです。

そんなフランツのことですから、またなにか、みんなをおどろかすことをたくらんでいるにちがいありません。

おとうさんだけは、うすうすそれを知っているらしい。だから、フランツがふらりと出かけて、ごはんどきまで帰ってこなくても、しかりもしなければ、どこへいったと、ききもしないのです。

それでフローネはなおさら、そのひみつが知りたくてたまりません。

それが、とうとうわかったのです。

フローネがひとりで見はり台へのぼって、船が通らないかと海のほうをながめていたときです——。

このごろフランツは、みんなにかくれて「ひみつ」にねっちゅうしていて、見はりのやくをなまけるので、フローネひとりで見はり台へいくのです。

すると、船は見えませんでした。森から海がんのほうへ、なにか木でつくったほそ長いものがうごいていくのが見えたのです。

それは、前もうしろもとがっていて、足があるわけでも、車がついているわけでも

ないのに、ひとりでにうごいていくのです。

いいえ、はじめはそう見えたのですが、よくちゅういして見ると、まん中へんに二本の足があって、それで歩いてうごいているのでした。

はじめ足がないように見えたのは、高いところから見ているので、そのほそ長いものの下になっている足が、よく見えなかったからなのです。フローネは、

「おや、おかしなものだなあ。」

と、思いながら、なおよくよくちゅういして見ると、そのほそ長いもの下にあるのは、二本の足だけではなくて、ちゃんと体も頭もある人間でした。

つまり、ひとりの人間が、せなかをうんとまげて、その上に、木でつくったほそ長いものをのせてはこんでいるのです。

「なあんだ、おにいちゃんじゃない。」

フローネは、思わず声に出していました。

「わかった。なんだか知らないけど、あれがひみつなんだわ。」

フローネは、いそいで見はり台をおりると、おにいちゃんのあとをおいました。

こんどは、まかれるしんはいはありません。むこうは大きなおもいにもつをせおっているのですから。

「あれ、きつと森の中でこっそりつくっていたんだわ。海へもっていくとすると、たいてい見当がつくわ。」

そう思いながら、フローネはフランツをつけていきました。

フランツが海について水の上にかべたのを見ると、思ったとおり、それはボートでした。ボートといっても、フローネがこれまでに見たのとはちがっています。

前とうしろはとがらせてありますが、人間ののるところだけあながあいていて、あとはふさいである、ずいぶんかわった形のボートです。

そして、あなはふたつあいていて、どうやらふたりのりらしいのです。

フローネは、フランツに気づかれないように、いわのかげからのぞいて見ていたのですが、ふたりのりとわかると、もうじつとしていられませんか。いわかげから走り出ると、大きな声でさけんでいました。

「見ちゃった！ 見ちゃった！」

フランツは、フロローネがきゆうにあらわれたのを見ると、いっしゅん、おこったようにまゆをつりあげましたが、もうかくしきれないと思つたのでしよう、

「しようがない。フロローネものせてやるよ。」  
と、いいました。

フランツは、フロローネをうしろのせきにのせると、一本で右にも左にもこげるかいでこぎはじめました。

「まあ、なんてすてき。」

と、フロローネは、心に思つたのですが、口では、

「風がわりなボートね。」

と、いいました。

「そうさ。カヤックだもの。」

と、フランツは答えました。

カヤックというのは、グリーンランド人のボートだそうですが、フランツは、どこでそんなかわつたボートのつくり方をならつたのでしよう。



「きつと、おとうさんにこっそり教<sup>おし</sup>えてもらったにきまっているわ。」  
と、フローネは思<sup>おも</sup>いましたが、それは口<sup>くち</sup>に出<sup>だ</sup>しませんでした。  
おにいちゃんのプライドをきずつけてはいけないと思<sup>おも</sup>ったからです。

## 11 どうくつの家いえ

フランツのつくったカヤックは、小回りこまわがよくでき、きしにちか近い、いわといわの間あいだを走はったり、なみのしずかなわんの中で、ちょっとした魚まなとりをするには、とてもべんりでした。

フランツは、フローネとジャックをかわるがわるカヤックにのせて、サンゴしょうにむらがつているうつくしいねったい魚ぎよをのぞかせたり、水みづの中のなかいわについている貝かいをとってくれたり、いっしょにつりをしたりして、楽たのしませてくれました。

しかし、カヤックでは、なみのあらい外海そとうみへのり出だしていくことはできません。それに、のれるのはたったふたりです。かぞく五人ごにんみんながのって、島しまから出でていくというわけにはいきません。

おとうさんが、このカヤックを見みて、ためいきをついていいました。

「船ふねがつくれたらなあ……」

ふたりのりのボートではなく、人間五人のほかになん十日分もの食べものをつんで、なみのあらい外海へのりだしてもひっくりかえらないような、大きな船をつくること  
ができたなら、オーストラリアまでいけるでしょう。

たとえオーストラリアまではいけなくても、人のすんでいる島へ、いきつくことができるでしょう。

「木はたくさんあるのにね。」

と、おかあさんがいます。

「そう。しかし、どうぐはあるが、つくり方を知らない。」

と、おとうさんがいます。

もの知りのおとうさんも、大きな船のつくり方までは知らないのです。

むじん島ぐらしは、いったい、いつまでつづくのでしょうか。

わるいことに、雨のきせつがやってきました。くる日もくる日も雨です。

雨ふりで一番こまったのは、家の雨もりです。木の上の家のやねは、木のかわや草

でつくってあるので、なん日も雨が**つづく**と、くさってあながあいたり、あなはあかなくても、水が**しみ**みて、ぼたぼたおちてくるのです。

といって、またテントの家にもどるわけにもいきません。

テントだって、**長雨**では雨もりがするし、じめんからも**雨水**がながれこみます。

雨がふりだしてから、ジョンのすがたが見えなくなりました。

家のある木の根のそばに、ジョンのこやがつくってあって、ジョンはそこでねていたのですが、雨が**なん日も**つづくようになると、おかあさんがえさをやる**時間**にはそこにもどってきませんが、そのほかの時は、どこへいつているのか、こやは、あき家になっっています。

きっと、ジョンのこやも**雨**びたしていごこちがわるく、もっといごこちのよいところをみつけたにちがいありません。

「そんないごこちがよいところがあるなら、わたしもいきたいわ。」

そう**思**って、フローネは、ジョンが、えさを**食**べてから**帰**っていくところへ、ついていくことにしました。

ジョンは山のほうへいきます。まるで、とてもかよいなれた道をいくように、わきめもふらず、すたすたと小走りにいきます。

「ジョン、そんなに早く走らないで。」

と、フローネはうしろから声をかけました。

すると、ジョンはフローネのことばがわかったのか、ゆっくり歩きはじめます。

おにいちゃんのように、フローネをまいたりしません。かえって、つれができたのをよろこぶように、フローネをふりかえりふりかえりして、フローネがおくれると、立ちどまってまってくれさえます。

大きないわのあるところへきました。

「いったいどこへつれていくつもりかしら。」

フローネは早く行き先が知りたくてたまりません。それに、雨がたえまなくふっています。まごまごしている、びしょぬれになってしまいます。

「ジョン、走ってもいいわよ。」

こんどはぎやくにジョンをせきたてて、フローネは走りだしました。

ジョンはいさんでかけだします。走るはしることにかけては、フロローネよりジョンのほうがずっとうわてです。またたくまに、フロローネはジョンを見みうしなってしまうました。そこは、大きいおおわのかべがきり立たっているところでした。

「ジョン、ジョン、どこへいったの。」

フロローネは、うろろうしながら、ジョンをよびました。こんなさみしいところで、まい子こになったのではかないません。

「ジョン、ジョンおいてかないで。」

すると、フロローネのすぐうしろで、

ワン!

と、ジョンがほえるではありませんか。

フロローネは、びくっとしてふりかえりました。

「ジョン、おどかさないでよ。」

見みると、そこはほらあなです。いわにだれがほったのか、それとも、しぜんにあいたあなのか、人ひとが少すくしかがめばはいれるくらいのアナがあいていて、おくはふかい

らしく、中はまっくらです。

そして、その入り口にジョンが首だけ出しているのです。

「まあ、ほらあなじゃない。」

フロアーネはすぐに、まわれ右をすると、ころがるように、いまきた道をかけたしました。こわかったからではありません。早くおとうさんに知らせなければならぬと思っただけです。

おとうさんもフランクも、ほらあなときいて、よろこんでいます。しかし、おかあさんは少しきみわるがっているようです。

そこで、みんなで見つめてみることにしました。

おとうさんは、銃をもち、フランクは、たいまつをよういしました。

ジョンが、まるでみんなでくることがわかっていたみたいに、とちゅうまでむかえにきていました。

ほらあなの入り口につくと、フランクは、たいまつに火をつけました。

ほらあなの中に、なにかけだものでもいてはきけんだからと、まずおとうさんが、

ほらあなたのおくへむけて、銃を一ぱつうちました。

ダーン！

しばらくまちました。なにもうごきません。

「よし、はいつてみよう。」

おとうさんは銃をフランツにわたし、フランツからたいまつをうけとって、それがかかげると、先頭になって、ほらあなたにはいりました。みんなもあとにつづきます。

すると、どうでしょう、入り口は少しせをかがめないとはいれなかったのに、中はドームのように広びろとしているではありませんか。

でも、たいまつでよくてらしてみると、上はまるでんじょうになっているわけでは  
ありません。まるで水のしずくのような形に、いわがたれ下がっています。そして、  
下からはタケノコのような形にいわが生えたようになっていきます。それがいっぱいあ  
るのです。

「こりゃ、しょうにゅうどうだ。」

と、おとうさんがいいました。

「でも、どこにも水みづがながれていないようですね。」  
と、おかあさんがいいました。

「うん。どこもぬれてないし、水みづの音ねもしないよ。」  
と、フランツがいいいます。

しょうにゆうどうには、かならず地ち下か水すいがながれているものなのです。

「なにかのかけんで、地ち下か水すいがかれたんだらう。それもだいぶ前まえ。からからにかわいてる。こりゃ、すむのにもってこいだ。ここをわれわれの家いえにしよう。」

「そうですね。ここなら、どんなに雨あめがふってもへいきだわ。」

おとうさんも、おかあさんも、大おおよろこびです。

「わたしがみつけたんだから。」

と、フローネはとくいいになっていいました。ほんとうは、ジョンが一番ばんにみつけたのに。

そのとき、フランツが、みょうなかすれた声こゑでいいました。

「あ、あ、あれ、なに。」



フランツがゆびさすところを、おとうさんが、たいまつを近づけてよく見ました。  
「まあ！」

おかあさんも、へんにふるえた声で、小さくさげびました。

そこに人間のほねがあったのです。されこうべから、ろっこつ、手足のほねまで、そっくりそろって。でも、形はくずれていました。

フローネは、ふしぎに、こわいとは思いませんでした。

「あら、男のがいこつかしら、女のがいこつかしら。」

と、少しふざけていいました。ほんとうはこわいのをごまかして、ふざけてみせたのかもしれない。

「男だ。」

と、いしやのおとうさんは、すぐにいいました。

「やはり船がなんぼして、この島にながれつき、ここにすんでたんだらう。」

「ぼくたちも、さいごはこうなるのかな。」

と、フランツがいました。

「ばかなことをいうんじゃない。この人はたったひとりだったから、生きつづけられなかった。わたしたちは五人もいるじゃないか。しかも、あいし合っている、ひとつのかぞくだ。」

と、おとうさんがいいました。

## 12 どろぼうがいる

木の上の家からどうくつへひっこしをする前に、どうくつにあった人間のほねを、海に見えるおかの上にほうむりました。

おとうさんとフランスが土をほって、ほねをうめ、フロローネがその上に、木の十字架を立てました。

「どこの国の人かわからないが、生まれた国をこいしがっているにちがない。ここからは海が見える。海はどこの国にも通じている。」

と、おとうさんがいいました。

「きつと、よろこんでいますよ。たとえほねになっても。」

と、おかあさんがいいました。

そして、みんなはひざまずいて、いのりました。

また、あらしがきました。フローネたちがなんぱしたときのような、はげしい雨風あめかぜです。そして、こんども、なんぱした船ふねがあったらしいのです。

なぜなら、すなはまに、なんぱ船せんのものとおもわれる、ウイスキーのたるとか、ポートのこわれた切れきりはしとか、ちぎれたほぬのとかが、ながれついたからです。

フローネたちの一家五人いんは、どうくつの家いえにひっこしていましたから、あらしは少しもこわくありません。

ジョンがどうくつを見つけてくれたのは、ほんとうにお手てがらでした。

あらしがやんで数日すうじつ後のことごとです。おかあさんのやきばたのやさいがぬすまれると  
いう、じけんがありました。

やきばたというのは、草くさや小ちひさな木きをやいたあとにたねをまいたはたけのことです。  
あたたかく、雨あめもてきとうにふる土地とちなので、やさいのそだちの早はやいことは、おどろくばかりです。とくに、ウリは、ついこのあいだ花はながさいたばかりとおもっている  
と、いつのまにか、もう大おおきな実みが、ごろごろとなつていのです。

そのウリの実のいくつかを、なにものかがぬすんでいったのです。それも、毎晩のようによ。

そうです、朝、いってみると、大きいのがなくなっているのです。

「きつと、またサルのはわざよ。」

と、フローネがいました。

「どうぶつかなあ。」

おとうさんが、うたがわしそうにいました。

「サルにしろ、イノシシにしろ、どうぶつなら、すぐに食べるだろう。そのへんに食べのこしがちらばっていそうなものだ。」

しかし、どこを見ても、食べのこしがありません。ただ大きな実がいくつか、きれいになくなっていてだけなのです。

つぎの夜、おとうさんとフラントツが、はたけて見はるようになりました。

まっくらななかに、ふたりは銃を手に、身をふせて、じつと、ウリが一番たくさんなっているあたりをにらんでいます。

すると、あらわれたのです。たしかになにもものが。くらくて、サルかイノシシかわかりませんが、いえ、どうやらイノシシではないようです。

というのは、そのなにもものは四つ足ではなくて、二本の足で歩いてきたからです。二本の足で歩くのは、人間のほかにサルがいるだけです。すると、やっぱりサルでしょうか。

そのサルらしいなものは、やはり、ウリをもいで、むねにかかえました。フランツが銃のひきがねに手をかけます。

すると、おとうさんが、まて、というようにフランツのうてをおさえました。

そして、おとうさんは、ぱっととび出して行って、そのサルらしいなもののうてをねじあげたのです。なにもものは、にげようとウリをなげ出して、しきりにもがきましたが、おとうさんは、しっかりおさえこんでしまいました。

「フランツ、明かりをつけるんだ。」

フランツは、よういしてあったたいまつに火をつけました。

「あっ、人間だ。」

フランスは、おどろいてあやうくたいまつをとりおとしそうになりました。おとうさんにおさえこまれていたのは、フランスよりも小さい少年だったのです。

「ごめんなさい、ごめんなさい。」

少年は、色が黒くてヨーロッパ人ではないようです。

ぶるぶるぶるえています。

おとうさんは、少年をおさえている手をはなして、いいました。

「こわがらなくてもいい。ウリはほしただけあげよう。しかし、そのまえに、きみはいったいどのだれなのか、教えてくれ。」

少年はオーストラリア人でした。水夫の見習で船にのっていたのですが、このあいだのあらしでなんぱして、この島にながれついたのでそうです。

そして、もうひとり、いっしょにながれついたものが出て、その人はけがをしていて、かいがんのいわかげにねているというのです。

おとうさんとフランスは、少年のあんないで、すぐにかいがんへとんでいきました。

すると、岩のかけにねていたのは、年とった水夫でした。ひどいけがでうごけません。おとうさんとフランチが、けがをした老人をかかえ、見知らぬ少年をつれて、どうくつの家にもどりました。

おかあさんとフロネがびっくりしたことは、いうまでもありません。

いしゃのおとうさんが、老人のけがの手当てをしたことも、これまた、いうまでもありません。

老人はやがて、けががなおって元気になりました。しかし、この老人はへんくつものでした。

おかあさんが、しよくじをつくってやると、老人は、

「わしはスイスリょうりは口にあわんでのう。」

といって、つきかえます。けがで体がいうことをきかない間は、だまって食べていたくせに。

そして、自分でつくって食べるのですが、それがどう見たって、おかあさんのつく

るものよりずっとまずそうなものなのです。

それから、フローネやジャックが、なかよくしようと、老人に話しかけると、

「わしは、子どもはうるさくてきらいじゃ。」

といって、せなかをむけてしまいます。

そればかりか、オーストラリア人の少年がフローネやジャックとなかよくすること  
もきらいます。

少年がフローネやジャックといっしょにあそんでいるのを見ると、すぐに少年をよ  
びつけて、どうでもよいような自分の用をいいつけるのです。

そして、ある日、とうとう老人は少年をつれて、はじめにいたかいがんのいわのか  
げにもどってしまいました。

「わたしたちのしんせつが、めいわくそうでしたね。」

と、おかあさんはざんねんそうにいました。

「なに、気がねをしているのさ。すきなようにくらししてみたらいい。たすけがひつよ  
うなときは、むこうから、いつてくるだろう。」



と、おとうさんはあまり気にしないようにしていました。

それから二、三日して、はたしてオーストラリア人の少年が老人のつかいで、おとうさんをよびにきました。

でも、それはたすけをもとめに来たものではありません。老人はおとうさんにそうだながあったのです。そのそうだんというのは、みんなのうんめいを、ふたたび大きくかえるようなものなのです。

おとうさんは、老人のところまで長いこと話しこんで、夕方帰ってきました。

その老人は船のりでしたが、わかいは船大工でした。ですから、船のつくり方を知っています。少しはわすれたところもありましたが、だいたいのところはまだおぼえているのです。

けれども、ひとりではつくることができません。それで、おとうさんに、力を合せて船をつくって、この島から早くにげ出そうと、そうだんしたのです。

もちろん、おとうさんは、すぐしょうちしました。ねがってもないことだったのですから。

よく日から、おとうさんとフランツは、あるだけの大工<sup>だいく</sup>どうぐをもって、まるで会社<sup>かい</sup>社<sup>しゃ</sup>へでもかようなように、老人<sup>ろうじん</sup>のところへ出<sup>で</sup>かけていきました。

さっそく船<sup>ふね</sup>づくりにとりかかったのです。

森<sup>もり</sup>で木<sup>き</sup>を切りたおすことからはじめて、それを、いたにしたり、はしらにしたり、そしてそのいたやはしらをまげたり、組<sup>くみ</sup>み合わせたりします。

毎日<sup>まいにち</sup>、老人<sup>ろうじん</sup>のさしずするとおりに、おとうさんもフランツもいっしょうけんめいはたらきました。

そのあいだ、食<sup>た</sup>べものを手<sup>て</sup>に入れるしごとは、おかあさんとフローネのやくめになりました。

その日<sup>ひ</sup>その日<sup>ひ</sup>にみんなが食<sup>た</sup>べるものだけでなく、船<sup>ふね</sup>で島<sup>しま</sup>を出<sup>で</sup>るときに船<sup>ふね</sup>につんでいくしよくりようも、たくわえなければなりません。

もうフローネも、あそんでいるひまはありません。おとなも子<sup>こ</sup>どもも、毎日<sup>まいにち</sup>毎日<sup>まいにち</sup>、大い<sup>おお</sup>そがしです。

しよくりようあつめには、オーストラリア人<sup>じん</sup>の少年<sup>しょうねん</sup>が手<sup>て</sup>をかしてくれました。

少年は船づくりの手つだいをするには、まだ力がたりなかったのです。

そのかわり、野生のどうぶつをわなにかけてとったり、木の実をさがしたりすることとは大とくいでした。

ヤシの実をとるときなどは、わにむすんだ一本のなわで、えだのないヤシの木を、ヤシガニよりも早くのぼって見せました。

### 13 さようなら、むじん島

船ができてあがりました。形はおせじにもよいとはいえませんが、かなり大きなものです。

七人の人間がらくらくのれます。そのほかに一か月分ぐらいのしょくりようもつむことができるでしょう。

ついに、このむじん島からだっしゅつする道がひらけたのです。それも、もうすぐなのです。

「ゆめのような気がするわ。」

と、おかあさんが、だれよりもうれしそうにいいました。

「しょうじきのところ、もう一生この島から出られないのかと思っただこともあったかな。」

と、おとうさんも、ひとみをかがやかせていいました。

「ぼくは、ぼくひとりでも船をつくってみせようと思ってたんだ。」

と、フランツは、なんでもないことのようにいいました。

「わたし、むじん島のくらし、べつにいやじゃないけど。」

と、フローネは、わざとうれしくないような顔をしていいました。

ほんとうは、また船にのってかわったことがおきると思うと、うれしくてたまらなかつたのですが。

しかし、しゅっぱつの日が近づくと、ひとつのこまったもんだいもちあがりました。

犬のジョンは、もちろん、いっしょにつれていくことにきまっていましたが、プチクスクスのメルクルはどうするかということです。

「メルクルをおいていくなんて、考えられないことよ。」

フローネは、とうぜん、つれていくつもりでいました。

ジャックはきつと、メルクルをしっかりだいてはなさないでしよう。

でも、おとうさんとおかあさんは、メルクルをつれていくことにはんたいなのです。

「メルクルはこの島で生まれたんだ。ここにおいていこう。手ばなしたくはないが、メルクルのためだ。」

と、おとうさんはいいます。

「そうよ。野生のどうぶつは、人間とくらすより、しぜんの中で同じなかまとくらすほうがいいの。」

と、おかあさんがいいます。

「でも、メルクルはとくべつよ。小さい時からずっと、わたしたちとくらしてきたんだもの。」

と、フローネは、メルクルがテントにもぐりこんできた時のことを思い出して、いいました。

「それは、メルクルがおかあさんをなくして、そだててくれるものがいなかったからよ。いまはもう大きくなったから、わたしたちとわかれても、ひとりで生きられるわ。」

そうおかあさんにいわれると、フローネは、かえすことばがありません。しぶしぶですが、なっとくしました。

しかし、まだ小さくてきき分けのないジャックには、いくら教えてやっても、わかるわけはありません。おとうさんとおかあさんの、なやみのたねでした。

「メルクル、メルクル。」

ジャックは、きょうも、一番の親友のようにメルクルとあそんでいます。

そのメルクルが、あしたはみんなで島をだっしゅつするという日の朝、いなくなっ  
てしまったのです。

メルクルは、これまでも、ジャックが目をはなしたすきに、ふっといなくなるこ  
とがありました。

どこへかくれるのかわかりませんが、しばらくすると、どこからともなくもどって  
くるのです。

「メルクル、おまえ、どこへいったんだ。」

と、ジャックがきいても、むろん、メルクルは答えません。

「メルクルだって、ときには、ひとりきりになりたいのよ。」

と、おかあさんはいったものです。

しかし、こんどはいつもとちがっていました。

ひとりになりたいには、いない時間が長すぎます。朝、ジャックが目をさました時、もうどこにも、すがたが見えなくて、お昼になっても帰ってこないのです。

「メルクルがいない。メルクルがいない。」

と、ジャックは、とうとうなきだしました。

「おとうさんとおかあさんが、かくしたんでしよう。」

と、フローネがいます。

「いいえ。」

「そんなことはしない。」

おかあさんもおとうさんも、はっきり首をよこにふります。

「おかしいなあ。」

と、フランツがふしぎそうにいます。

ジャックは、ますます大きな声でなきます。

みんなでそこらをさがすことになりました。どうくつの中は、どこをさがしてもいません。前にすんでいた木の家のあたりにもいません。はじめにすんでいたテントのあたりにもいません。

さいごに、みんなは森へいってみました。すると、いたのです。メルクルは森にきていたのです。

でも、メルクルは森にひとりできて、まいごになっていたではありません。もう一ぴきのプチクスクスといっしょに、木のえだの上を、あっちへいたりこっちへきいたりして、楽しそうにあそんでいたのです。

「あつ、メルクル。」

ジャックが、まっさきにかけていって、よびかけました。

「メルクル、メルクル。」

しかし、メルクルも、もう一ぴきのプチクスクスも、木の高いところへのぼって、おりてこようとしません。

「メルクル、メルクル。」

「メルクル、メルクル。」

フローネがよんでも、フランツがよんでも、メルクルはおりてきません。

「メルクル、聞こえないのか。」

「メルクル、どうしたの。」

おとうさんがよんでも、おかあさんがよんでも、メルクルは、もう一ぴきのプチクスクスとあそぶのにむちゅうで、おりてきません。

「メルクル、メルクル。」

よびながら、ジャックは、またなきそうになりました。

「ジャック、メルクルにはお友だちができたのよ。だれだってお友だちとあそびたいでしょ。ほっといてあげなさい。」

と、おかあさんがいいました。

「メルクルの友だちはほくだい。」

と、ジャックがおこっぺいいいます。

「だが、ジャック。おまえはメルクルのガールフレンドにはなれないぞ。」

と、おとうさんがいいました。

「えっ。」

ジャックは、キョトンとした顔かおをして、おもわずおとうさんの顔かおを見みました。

「わからないか。あのメルクルとあそんでいるもう一ひとびきのプチクスクスは、めすなんだ。つまり、メルクルのガールフレンドなんだよ。友ともだちもいいもんだが、ガールフレンドはもっといいものなのさ。」

「ハハハハ。」

「ハハハハ。」

フローネとフランツは大おおわらいです。

「ホホホホ。」

と、おかあさんまでわらいだしました。

「ジャック、メルクルはガールフレンドにゆずるんだね。オーストラリアへいけば、

おまえにもガールフレンドができる。ハッハッハッ。」

と、おとうさんもわらいだしました。

「ハハハハ。」

「ハハハハ。」

「ホホホホ。」

「ハッハッハッ。」

フローネもフランツも、おかあさんもおとうさんも、わらいつづけです。

こうみんながわらっているのは、ジャックひとりなくわけにいきません。ジャックもとうとうわらいだしました。

「イヒヒヒ。」と、はじめはぎこちなく、つぎは、

「ウフフフ。」となり、それからやっと、

「アハハハ。」と、ほんとうのわらい声こゑになりました。

でも、ジャックは、メルクルをなくしたのに、なぜわらわなければならないのか、わかっていないにちがいありません。

これで、ジャックからメルクルをひきはなすむずかしいもんだいは、かいけつしました。

「さようなら、むじん島。」

七人の人間と一匹の犬をのせた、手づくりの船が島のきしをはなれました。老人が船長で、オーストラリア人の少年がかじとりです。おとうさんとフランツはこぎ手、おかあさんとフローネとジャックとジョンは、おきやくということになるでしょうか。見おくってくれる人は、だれもいません。

それでも、みんなは島にむかって手をふりました。

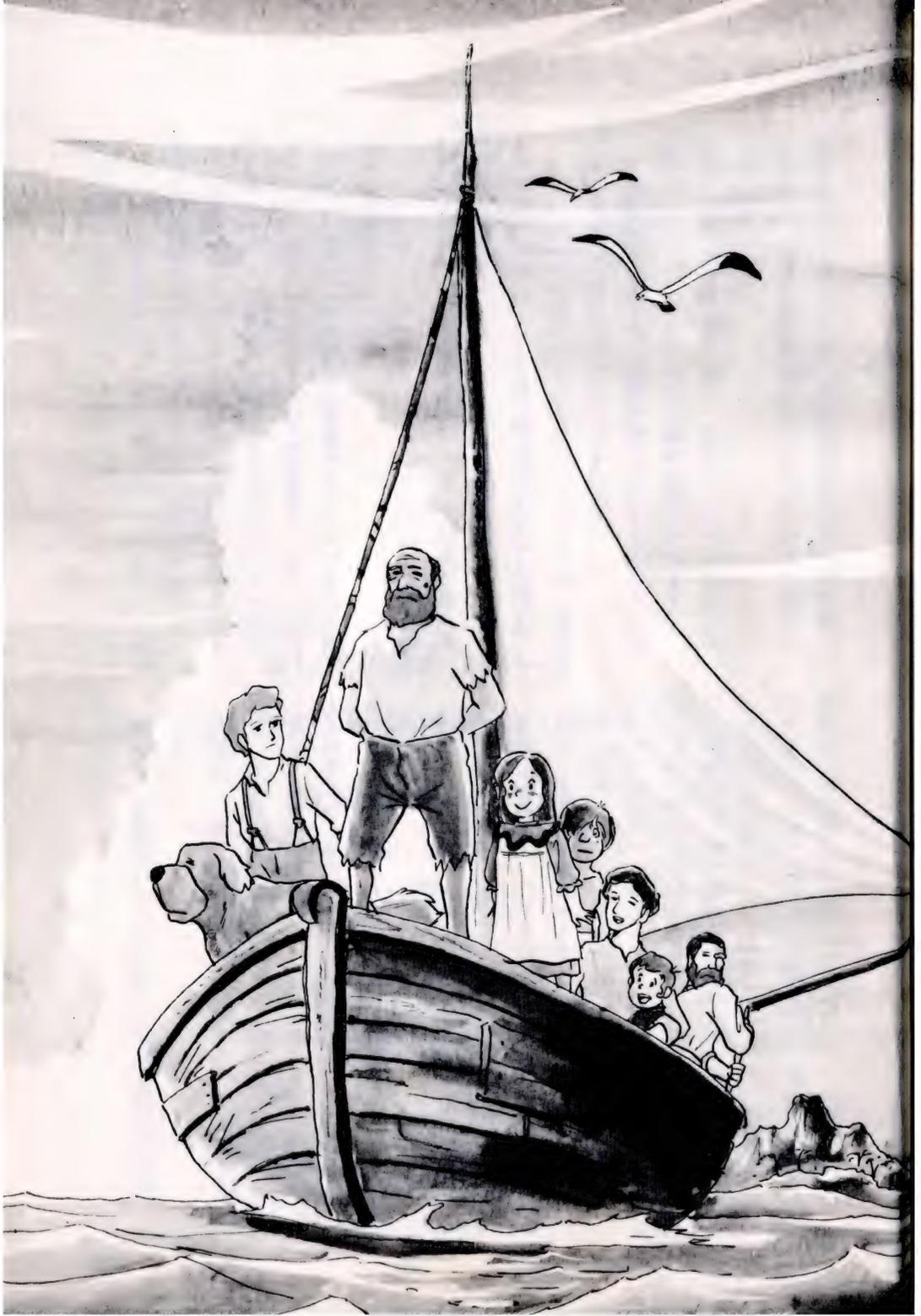
「さようなら、さようなら。」

と、みんなは声に出して、むじん島にわかれをつげます。

フローネは、心の中でいいました。

「さようなら、わたしのふしぎな島。さようなら、ヤシガニさん。さようなら、木のおばけさん。さようなら、こわいジャッカルさん。みんなみんな、さようなら。」

(ふしぎな島のフローネ・おわり)



へお母様がたへ)

デフォー作の漂流記、『ロビンソン・クルーソー』を知らない方はいないでしょう。デフォーの『ロビンソン・クルーソー』にヒントを得て書いたのが、ヨハン・ダビット・ウィース(Wyss, Johann David)の『スイスのロビンソン』(Der Schweizerische Robinson)です。一八二二年にできたこの物語は『家族ロビンソン』という別名でよく知られています。

デフォーの『ロビンソン・クルーソー』は、ご存じのように、ロビンソンという船乗りがたった一人て無人島に漂流する話です。ウィースの『家族ロビンソン』は、その題名の通りに、一家全員で無人島に漂流する話です。この『ふしぎな島のフロネ』は、ウィースの『家族ロビンソン』を参考にして書いたものです。

大筋は似ていますが、低学年向きにやさしくしたこと、を別にしても、いくつかの点で趣向を変えています。

第一は主人公を父親でなく、子ども、それも女の子にしたこと。

第二に、一家の家族構成を変えたこと。両親と男の子ばかり四人であったのを、両親と男の子二人、女の子一

人にしたこと。

第三に、難破漂流にいたるまでの経過を頭につけ加えたこと。

第四に、一家に加わる新たな漂流者を一人の少女でなく、老水夫と水夫見習の少年にしたこと。

そして第五に、無人島からの脱出を、イギリス軍船による救助という他力ではなく、漂流者集団の知恵と努力の結集によって船を建造して自力で果たすということにしたこと。

細部も、まったくといってよいほど、ことなっています。

お子さんたちが、これをおもしろく読んでくださるかどうか、自信はありませんが、もしこの本がきっかけで、ウィースの『スイスのロビンソン』、さらにはデフォーの『ロビンソン・クルーソー』も読んでみたいという気持ちをお子さんたちがもたれるようになれば、それだけでこの本の作られた意義は十分だと思います。

どうか、『ロビンソン・クルーソー』や『スイスのロビンソン』というおもしろい漂流物語のあることを、お子さんたちに教えてあげてください。(松田昭三)

世界名作ものがたり33

## ふしぎな島のフローネ

---

昭和56年3月12日 初版発行 検印省略

文／松田昭三

発行人／村山 実

印刷／フォト印刷（株）

製本／島田製本（株）

発行所／株式会社 朝日ソノラマ

郵便番号104／東京都中央区銀座4-2-6  
第2朝日ビル

振替 東京2-40311／電話 東京(563)6021~3

---

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

(分) 8 0 9 7 (製) 7 2 3 0 3 3 (出) 0 0 4 9

《朝日ソノラマの子どもの本》

新シリーズ

## 世界のむかし話

小学校低学年の子どもたちのために、たしかな資料にもとづいて精選した欧米各地の民話、伝説、神話の数々。A5判。全6巻。各680円。

- 1 <フランス編> 「長くつをはいたネコ」など6話
- 2 <イギリス編> 「おやゆびトムのぼうけん」など10話
- 3 <ドイツ編> 「しあわせのハンス」など8話
- 4 <アメリカ編> 「ウサギどん キツネどん」など8話
- 5 <北ヨーロッパ編> 「北風のくれたテーブルかけ」など7話
- 6 <ギリシャ編> 「王さまの耳はロバの耳」など8話

## 日本名作ものがたり

数多くの日本名作を、各巻ごとにテーマをきめて、第一線の児童作家が、原作の味を十分生かして書きおろしました。A5判 全10巻 各巻160ページ。680円。

- ①かぐやひめ ⑥つるのおんがえし
- ②あんじゅとずし王 ⑦うしわかまる
- ③彦一とんちばなし ⑧ゆきおんな
- ④海さちひこ 山さちひこ ⑨わらしべ長者
- ⑤大江山のおにたいじ ⑩やじさん きたさん

## 世界名作ものがたり

A5判 680円  
好評発売中!

— 小学校低学年むき —





世界名作ものがたり

小学学校低学年むき 好評発売中!

- ①アルプスの少女ハイジ
- ②ふしぎの国のアリス
- ③家なき子
- ④フランダースの犬
- ⑤オズのまほうつかい
- ⑥ピーター・パン
- ⑦小公王子
- ⑧あしながおじさん
- ⑨母をたずねて三千里
- ⑩ピノッキオのぼうけん
- ⑪みつばちマーヤのぼうけん
- ⑫にんぎょひめ
- ⑬くるみわり人形
- ⑭しらゆきひめ
- ⑮トム・ソーヤーのぼうけん
- ⑯王子とこじき
- ⑰わかくさものがたり
- ⑱シンドバットのぼうけん
- ⑲小公女
- ⑳たからじま
- ㉑こじかものがたり
- ㉒ハックルベリーのぼうけん
- ㉓ニルスのふしぎなたび
- ㉔赤毛のアン
- ㉕アラジンとまほうのランプ
- ㉖フンダー・ブック
- ㉗あらいぐまラスカル
- ㉘くまの子ジャッキー
- ㉙ペリーヌ物語
- ㉚偉人物語
- ㉛未来少年コナン





朝日ソラマ

(分)8097(製)723033(出)0049

定価680円